

松本時代の北杜夫 其の三

——與曾井湧司宛末公開書簡——

竹内 正（日本歌人クラブ会員）

はじめに

拙稿「松本時代の北杜夫 其の一」、「松本時代の北杜夫 其の二」（以下「其の一」「其の二」と表記）の調査研究を進めていく過程で、これまで関連する資料として、以下の資料と出会った。杜夫の松本時代は昭和二十年から昭和二十三年までであり、本年平成三十年（二〇一八年）から遡ること七十三年から七十年前のできごととなる。既に杜夫は逝去（平成二十三年十月二十四日）し、当時の状況を知る恩師や知人も年毎に亡くなっている現状であり、埋もれてしまっている資料も多い。そのため、ここに紹介する資料は当時の杜夫を理解し作品を解釈していく上で貴重な資料となると考える。

- 1 與曾井豊（湧司の子）インタビュー内容
- 2 與曾井湧司宛末公開書簡（一部茂吉の葉書に杜夫の寄書）
- 3 杜夫の下宿家屋（故中野太郎江方）
- 4 松本時代の杜夫が実際に手にしたと考えられる書籍（旧制松本高等学校（以下「松本高校」と表記）図書館並びに思誠寮図書室の書籍、現在は信州大学附属中央図書館書庫所蔵）
- 5 杜夫が初期作品を描く上で資料となったと考えられる『希臘羅馬神話』（信州大学附属中央図書館「北杜夫文庫」所蔵）

6 美ヶ原及び上高地方面等の資料

今回の「其の三」では、「1 與曾井豊インタビュー内容」「2 與曾井湧司宛末公開書簡」を中心に、論考を進めていくことにする。考察においては、まず本書簡との出会いの経緯を述べ、時系列に沿って書簡の一覧表を作成し整理していくことにする。その際、消印が読み取れず書かれた期日を特定し兼ねるものもあった。そこで、杜夫の日記（『或る青春の日記』¹以下「杜夫日記」と表記）及び茂吉の日記（『齋藤茂吉全集第三十二巻』『日記四』以下「茂吉日記」と表記）、杜夫の「年譜」（『北杜夫全集第十五巻』以下「杜夫年譜」と表記）、茂吉の書簡（『齋藤茂吉全集第三十六巻』『書簡四』『書簡補遺』）等を参考に、当時の杜夫の足取りを明らかにしながら、書簡の内容との整合性を検証し、書かれた期日を想察しつつ明らかにしていくことにする。従って、中には杜夫執筆の期日について筆者推定の書簡が一部含まれている。次に、実際の書簡写真掲載公開し文言を明らかにする。更に、書簡の書かれた当時の杜夫の背景・情況等について考察、書簡の解釈を進め、本書簡の文学的な価値を明らかにしていきたいと考える。

本書簡の中には、茂吉が與曾井湧司に宛てた葉書に杜夫が寄せ

書きしたものが二点あり、杜夫の記述については茂吉全集の「書簡補遺」未収録であるため、本論考に加えていくことにする。また、喜美子夫人が杜夫の不在時に贈物を受け取った際、杜夫に代わって湧司に宛てたお礼の葉書もあり参考資料とする。

本論考に関わる資料の著作権並びに掲載については、「おわりに」のように、それぞれ申請、許諾を得ている。

一、書簡との出会い

1 與曾井湧司宛書簡との出会い

杜夫は晩年、母齋藤輝子への追慕あふれる自伝的小説『母の影』^②を出版した。本書は全九章のエピソードから構成されており、前半の「神河内」「根津山」「夜光虫」「茶がら」には主に幼少年期から青年期にかけての思い出が描かれ、後半の「羽田の蝙蝠」「海彼の憧れ」「天衣無縫」「ついの宿り」には晩年も奔放に生を楽しむ輝子が描かれている。そして中ほどの「死に給う父」には父茂吉像が力強く描かれ、全体が抒情味豊かに構成されている。また、巻末には松本高校以来の親友辻邦生が「虫たちと歌の生命と」と題して解説を添えている。

第一章「神河内」冒頭には、初めて上高地を訪れた思い出を以下のように記している。

昭和二十年七月二十四日の夜、私は、松本で父の関係からさまざまな世話を受けた与曾井さんの御子息豊君と、島々宿の薄汚ない宿屋の一室に泊った。(P.9)

茂吉が與曾井湧司と短歌を通して懇意であり、茂吉の湧司への依頼で豊が杜夫を上高地に案内したこと、杜夫が下宿で世話になり交流があったこと等の事実については、既に「其の一」「其の二」に述べた。^③

筆者はその調査段階で、生前の豊と二度面識の機会を得た。一回目は平成二十七年八月五日、信州大学附属中央図書館に創設された「北杜夫文庫」閲覧後の自宅訪問であった。そこでは「神河内」に描かれた当時の杜夫との貴重なエピソードをインタビュー取材した。二回目はその三日後の八月八日であった。筆者は一回目の取材の翌日、豊より「土蔵の中の資料を見せてあげます」の電話を受け二度目の訪問となった。二度目は豊の子秀治も同席のもと、インタビューの後、土蔵にて以下の杜夫関連の資料を閲覧した。

- 1 杜夫から與曾井湧司への書簡 葉書15通
書簡1通
- 2 「齋藤宗吉内」(喜美子夫人) から與曾井湧司への書簡
葉書2通
- 3 茂吉から與曾井湧司への書簡 葉書5通(内2通杜夫寄書)
- 4 杜夫からの初版贈呈本 全集他42冊

豊によると、茂吉書簡(寄書葉書二通を除く)以外、これらの資料はいずれも未公開とのことであった。また、豊(当時八十七歳)へのインタビューの中心は、昭和二十年七月二十四日から二十九日にかけて杜夫を案内した上高地行についてであった。当時の貴重な証言資料として、筆者録音記録の一部を次に紹介する。

2 八月五日（一回目）訪問インタビュー 《インタビュー記録一部抜粋》

——昭和二十年の七月に北さんと上高地へ行かれた時はどんな様子でしたか。

上高地行った時はね、北さんと、ずっとあの峠を越えてね、それで上高地に着いて、大正池通って行ってねえ。山道を川沿いに歩いて行ってなあ。それであの、あそこの上高地のウェストンのレリーフまで行ってねえ。それでウェストンの銅像を眺めてねえ。北さんは一生懸命これ眺めていて、『これかなあ』なんて言ってるなあ。それから二人で河童橋まで行って、やっぱり山を眺めて、『やっぱり信州の風景は違うなあ』と言っていた。それで、まあそこで話をし、それから、あそこのホテルに泊まった。

——どんなお話をされましたか。

そんなとき話したのは、やっぱり、虫が好きだったでねえ、虫の話なんかを色々したなあ。

——四日ほど上高地においでになったようですね。二日目はどんな様子でしたか。

穂高の向こうまでは行かなかったけれど、途中までは行ったなあ。槍ヶ岳のな、あっちの方まで、途中まで行ったなあ。

——北さんは、宿泊ホテルでどんな様子でしたか。

まあずっとあるところを、空を眺めていると言うか、外を眺めていると言うか、そういう雰囲気だったなあ。何かじつとものを考えている時もあったなあ。

——北さんの思い出をお話ください。

北さんがまだ松高にいたとき、家の向こうのね、今は梅丸ハウスっていうビルがあるはなあ。昔は借家だったけど、あそこにねえ、旧制松高の時になあ、一年近く下宿していた。家に住んでいてなあ。大変だったから家に来たんだよ。荷物は家に置いてあっただよ。

それで、彼は東北大の医学部に行ってるなあ。俺もあれさ、工専から東北大の工学部に行っただよ。それで彼は一年先だったんだよ。学部が離れて、仙台に行った時は余り会う機会は無かったなあ。松本に帰ってきたときはたまに家に寄ってるなあ。それで、あと本をなあ。本を出版した時は、必ず俺の所に真っ先に送ってくれた。『これは先ず最初にさし上げます』というように書いてる。それな。それな。土蔵に今三十冊以上入っている。まあいろいろな思い出で、まあ本もよく書いて出してくれたなあ。

3 八月八日（二回目）訪問インタビュー 《インタビュー記録一部抜粋》

——前回北さんが「一年近く下宿していた」とお聞きしましたが、何か覚えておられることはございますか。

俺はあの時（昭和二十年七月二十九日、筆者記）なあ、上高地から下山してあの後、俺は七月、学徒動員で名古屋へ行つてなあ、空襲にあつただよ。これが空襲の時拾つて持ってきた米軍機の焼夷弾の筒だよ（豊は実際の焼夷弾の残骸の実物を手に取つて見せてくれた。筆者記）。

それから名古屋から帰つてきただよ。あの時北さんはどこに行つたのかなあ（杜夫は八月大町の昭和電工へ、二十八日から九月十二日まで山形の茂吉のもとへ、筆者記）。荷物は家に置いていたなあ。

――北さんが一人で山や空を眺め、一人でじつとしていたのはどのくらいの時間でしたか。上高地はよくご存じだったようですが、北さんをご案内される前に何回くらい行かれていましたか。

北さんはよく一人でじつとしていたなあ。一時間くらいはじつとして山や川を眺めていたなあ。上高地は中学時代に二、三回は登っていたなあ。

――岩魚釣りはどの辺りでしたか。

河童橋から下の方の川が分かれているところ辺りだったなあ。二人で釣ったなあ。釣った魚は逃がしてしまったなあ。

4 訪問のまとめ

豊は八十七歳という高齢でありながらも、遠い記憶を掘り起こす

ように語り伝えた。上高地行について語られた行程や杜夫の様子は「神河内」を彷彿とさせる内容であり、作品のリアリティーを裏付けるものであった。時として独り山を、空を、梓川を眺め入ったという杜夫の姿には、当時の戦局極まる中、一億玉砕を覚悟していたという杜夫の、ナイーブで感傷的な姿が思い浮かぶ。こうした沈黙の姿に、茂吉の作歌姿勢との共通性が指摘できる。昭和二十一年六月二十八日から八月二十三日まで杜夫は夏休みに山形大石田の茂吉のもと（聴禽書屋）で生活した。杜夫はこの時初めて茂吉の作歌の姿を目にしたという。

父はたまに私を連れて散歩に出た。ときどき立止つては瞑目した。手帳になにか書きつけることもあった。近所の神社の境内へ行くとき、サンダワラを持つていつて、それを地面に敷いて腰を下ろし、長いあいだじつと瞑目した。彫像のように身じろぎもなかった。（『茂吉晩年』（P.76））

これは杜夫が豊と上高地を訪れた翌年の出来事であり、上高地で杜夫がじつとして梓川や連なる山々に眺め入る姿は茂吉の真似ではなく、親子に共通する天性の感性かと豊の証言から推察できる。

豊は早生まれで杜夫と同学年であった。杜夫が松本高校一年の時、豊は工専（信州大学工学部の母体となった長野工業専門学校）一年の関係である。豊はその後工専を昭和二十三年三月に卒業し、東北大学工学部に進学した。当時、杜夫は荷物を與曾井宅に置いてしばらく行動していたようである。「一年近く下宿していた」という豊の言葉はそのためで、実際この時期の杜夫は、松本・東京・仙台等かなりの移動を重ねながら生活の場を変えていた（本論第二章第一節



故與曾井豊 平成 27. 8. 8 筆者撮影

参照)。

杜夫は昭和二十年の上高地行から二十三年の東北大学入学へと、松本高校時代を通して、茂吉と縁が深かった與曾井家の愛情と好意に温かく見守られながら過ごしたと察せられる。それ故に杜夫も作品出版の度に初版本を與曾井家に寄贈することを続けてきたものと考えられる。

今回、豊との邂逅により閲覧した二十三通にも及ぶ書簡それぞれに文面には、松本で多感な青春時代を過ごした当時の杜夫と與曾井親子(湧司・豊)との固い絆が読み取れる。

二、書簡の日付想察

1 昭和二十三年の足取り

與曾井書簡はその発信時期(消印)及び書簡形式から以下のⅠ(Ⅳ群に分類できる(第三章「書簡一覧表」参照)。

Ⅰ群 昭和二十年から昭和二十四年、杜夫の松本時代から仙台時代の初年度までの葉書10通。

Ⅱ群 昭和二十四年、仙台時代一年目の冬、ワラ半紙書簡1通。

Ⅲ群 昭和四十一年から昭和五十五年、世田谷自宅より葉書7通(内2通は夫人)。

Ⅳ群 昭和二十三年、茂吉の葉書に杜夫が寄せ書きした2通。

分類の際、消印解読不明の葉書については、書簡の内容を手がかりに杜夫の執筆時の状況や足取りについて関連資料に当たりながら整



北杜夫の寄贈本 平成 27. 8. 8 筆者撮影

理し、発信時期を推定した。特に杜夫が松本高校から東北大学に進学した昭和二十三年は、次のように「代田」「松本」「仙台」「箱根」と頻繁な移動がみられる（以下にその根拠となる資料を時系列にて一月から十月まで列挙し、隅付き括弧【 】で場所を明記する）。

- 1・1/1 代田の家で家族そろって正月を迎える。「家内寫眞、予、輝子、茂太、美智子、宗吉、昌子、茂一ノ七人デアッタ」（『茂吉日記』「昭和二十三年」（P.368）【代田】

- 2・1/11 「○宗吉午前10半新宿發ニテ松本へ出發シタ」（『茂吉日記』「昭和二十三年」（P.372）

- ・「一月、松本市大柳町一〇〇七に下宿を移す」（『杜夫年譜』（P.364）
- ・「一月、松本市大柳町小岩井外科病院に移る」（『杜夫年譜』（P.364）【松本】

- 3・2/23 「上京ナレ」（『杜夫年譜』（P.364）【代田】

- 4・3/13 「仙台に行き、東北大学医学部を受験し、合格する」（『杜夫年譜』（P.364）【仙台】

- 5・4/4 「宗吉外出」（『茂吉日記』（P.402）【代田】

- ・4/18 「夜、宗吉歸ル」（『茂吉日記』（P.405）

- ・4/4～4/18 松本行。（『杜夫日記』（P.7-22）【松本】

- 9・4/18～28 杜夫は東京に身辺整理、仙台行の準備をした。

（『杜夫日記』（P.24-26）【代田】

- 7・4/29 「仙台に今日来た。相変らずきたない街だ」（『杜夫日記』（P.26）

- ・「仙台市中島町（岡崎方）に下宿」（『杜夫年譜』（P.364）
- ・5/30 「午後、太田さんへ引越す」（『杜夫日記』（P.81）
- ・「仙台市北五番町の下宿へ移る」（『杜夫年譜』（P.364）
- ・6/20 「伊達さんへ引越した」（『杜夫日記』（P.148）【仙台】

- 8・6/27 帰京する。「夕食中、宗吉カクル 階下に寐ル」（『茂吉日記』（P.424）【代田】

- 9・7/12 「九時半の汽車。松本、懐く」（『杜夫日記』（P.170）

- ・7/14 「アンボン合宿」（『杜夫日記』（P.171）【松本】

- 10・7/18 「○宗吉、松本ヨリ歸ル」（『茂吉日記』（P.430）

- ・7/19 「○十一時スギニ宗吉ノ友人二人來リテトメル」（『茂吉日記』（P.430）

- ・7/20 「卓球インターハイ。富山を4―3で喰う。（中略）待望のインターハイの勝利を得た」（『杜夫日記』（P.172）
- ・7/21 「宗吉ノ友人カクル」（『茂吉日記』（P.431）【代田】

- 11・7/26 「親父ノ箱根」（『杜夫日記』（P.172）

- ・8/28 「茂一發熱（39°）シ終夜唸り、嘔吐（飯）シタ（後略）」（『茂吉日記』（P.442）

- ・8/30 「宗吉カクル」（『茂吉日記』（P.442）【箱根】

12・9/11「急行（九時）で仙台へ、夕方着」（「杜夫日記」（P.214-215））【仙台】

13・10/11「朝、仙台発。夜九時半東京着。夜行で松本へ」（「杜夫日記」（P.223））

・10/12～17「松本在。十八日帰京」（「杜夫日記」（P.223））、
「松高記念祭」（「杜夫日記」（P.224））に参加し、「（前略）浅間へ行ってまた多少フラフラしながらブルンネンの下宿へ行った。バカ話をして、あと與曾井さんで泊まる」（「杜夫日記」（P.223））

・10/20「午後四時家を出、辻のところへ行つて、夜八時まで話す。（中略）午後九時十五分の汽車で帰仙」（「杜夫日記」（P.224））【東京経由で松本、その後東京経由で仙台】

2 書簡の日付推定

與曾井湧司宛書簡中、消印不明の書簡（葉書）は十二点であった。本論考では特に、昭和二十一年から昭和二十四年にかけての以下九点について執筆時を検討する（資料番号は第三章、書簡一覧表参照）。

- 1 北—I—2 （松本市出川町 松高思誠寮より）
- 2 北—I—3 （山形県北村山郡大石田町 二藤部方より）
- 3 北—I—4 （世田谷区代田より）
- 4 北—I—5 （世田谷区代田より）
- 5 北—I—6 （仙台市中島町四六 岡崎方より）

- 6 北—I—7 （仙台市中島町四六 岡崎方より）
- 7 北—I—8 （世田谷区代田より）
- 8 北—I—9 （仙台市支倉通一 山本方より）
- 9 北—I—10 （世田谷区代田より）

北—I—2

本書簡本文に「小生三月三日より当地に來て南松本の日本ステンスの寮に居ります。学校まで歩いて四〇分かゝるので閉口です。十八日から試験■ですが休み中何もしなかったので大アワテをしてゐる所です」とあるところから、松本高校二年進級時の情況を伝えた内容である。茂吉が「一月末より山形県北村山郡の大石田と云ふ所へ移りました」とあることから、昭和二十一年三月三日以降の上旬執筆と推定する。

北—I—3

本書簡は「7・6」の消印が確認できる。差出元が「山形県北村山郡大石田町 二藤部兵右衛門様方」であり、「二十八日に当地に着きました」とあり、茂吉の病状について伝えているところから、昭和二十一年二度目の大石田茂吉との生活時（六月二十八日から八月二十三日）の葉書と理解できる。本書簡は昭和二十一年七月六日頃執筆と考える。

北—I—4

本書簡本文に「松本滞在中は本当にお世話様になりました。東京もやうやく本格的の春日和に櫻もポツ／＼ほころびかけた様子です。小生何とか仙台医科へは入れましたので、近い中に荷物をまとめに行かうと思ひます」とあることから、東北大学合格を伝える内容である。本論第二章第一節「昭和二十三年の足取り」を見ると、杜夫

は二月二十三日に上京し、三月十三日に大学を受験した。その後四月四日から四月十八日まで二週間ほど松本に滞在した。「二ヶ月も山を見ないとも足らなくて困ります」とあることから、本書簡は二月の上京後足掛け二か月の四月上旬頃、松本行の直前、昭和二十三年四月上旬頃執筆と推定する。

北—I—5

本書簡は「4・28」の消印が確認できる。大学に合格した杜夫は二週間の松本行の後、四月十八日から四月二十八まで代田にて身辺整理、仙台行の準備をした(本章第一節「昭和二十三年の足取り」参照)。本書簡には「まだ東京でモサくしてゐます。(中略)明後二十九日に立つ豫定です」とあり、昭和二十三年四月二十七日の執筆と考える。

北—I—6

本書簡消印は不明であるが、表の差出人住所の上に杜夫自筆で「五月二日」とある。差出元が仙台市であり、「二十九日はやっと当地にきました」と仙台での生活が始まった様子を伝えていることから、昭和二十三年五月二日の執筆と考える。

北—I—7

本書簡は松本からの荷物が仙台に届いたことへの謝辞を述べ、「仙台もこの二・三日やっと五月らしい日の光がみなぎって」と五月の所感や講義の感想を伝えている。文末に「五月六日」とあり、昭和二十三年五月六日の執筆と考える。

北—I—8

先の「昭和二十三年の足取り」を見ると、四月二十九日の仙台市中島町岡崎方への下宿以降、杜夫は太田方、伊達方と下宿を移った。その後、六月二十七日に一旦帰京するも七月十二日から七月十八日

には再び松本を訪れ、ピンポン合宿に参加した。七月十八日にはインターハイ出場選手と上京、友人を自宅に泊め、七月二十日のインターハイを観戦している。本書簡では七月十八日午前二時頃からのストーム、上京の様子、インターハイの結果、更には甥の盲腸で帰仙に時間がかかっている事情を伝え、冒頭には「僕は明日立つ豫定で荷作りしてゐるところです」とある。杜夫が箱根の童馬山房にて茂吉の身の回りの世話をしたのは七月二十六日から八月三十日であり、帰仙したのは九月十一日である。以上の状況と本書簡消印の確認できる日付「11」より、本書簡は昭和二十三年九月十日の執筆と推定する。

北—I—9

昭和二十三年十月十二日より十七日にかけて杜夫は単身密行し「松高記念祭」に参加した。本書簡に「信州行きはどうやらホ、ホ、カムリしてごまかしてしまひました故何とぞそのお積りでめて下さい」(傍点筆者)とあり、内緒の由を伝えている。日記に「與曾井さんで泊まる」(「杜夫日記」(P.223))とあり、冒頭の「先日は色々お世話様になり本当に有難うございました」は密行宿泊の際の感謝と考えられる。本書簡は消印「10・27」があり、差出元が「仙台市支倉通一山本和様方」⁶⁾とあることから、松本から仙台に戻った杜夫が昭和二十三年十月二十六日頃に執筆したものと推定する。

北—I—10

差出元が代田、冒頭「謹賀新年」とあることから東京からの年賀状である。「医学部は十五・六日から初まるので間もなく歸仙する積り」とあり、新年になつてからの執筆と推察する。「茂吉日記」(「昭和二十四年」(P.464))の「一月十日」には「○宗吉朝、仙臺に立立」⁷⁾とあり、本書簡は昭和二十四年一月十日より前の執筆と推定する。

與曾井湧司宛書簡一覧表

I：昭和20. 10. 5～昭和24. 1、II：ワラ半紙書簡、III：昭和41. 6. 14～昭和55. 12. 8、IV：昭和23. 2. 24～昭和23. 4. 23

資料番号	表題(宛名)	作成者	作成年代	形態	数量	差出元	概要
北 I 1	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S20.10.5(消印)	葉書	1通	松本高校思誠寮内	無沙汰詫び、安否。前の日曜日に「美」(「美」は「美ヶ原」筆者記)に行つて失礼したこと。ようやく軌道に乗った授業のこと、豊と上高地へ行つた際の写真等。
北 I 2	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S21.3.3以降の上旬(学校再開後、3.18の試験前の時期)	葉書	1通	松本市出川町 松高思誠寮	松本高校2年進級時、昭21.3.3より西寮(南松本の日本ステンレスの寮)、3.18からの試験のこと、茂吉大石田引越し、豊のこと等。
北 I 3	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S21.7.6(消印)	葉書	1通	山形県北村山郡大石田町 二藤部兵右衛門方	茂吉の病状を氣遣つたと察せられる與曾井湧司への返信。茂吉の病状、山形の氣候についての所感。
北 I 4	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S23.4.上旬頃(推定)	葉書	1通	世田谷区代田(茂吉の住所印)	お礼、東京の桜、合格報告、荷物をまとめて行く件、2月の上京、受験、合格まで凡そ2か月間信州の山を見なかった所感。
北 I 5	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S23.4.28(消印)	葉書	1通	世田谷区代田(茂吉の住所印)	東京在、荷物のお礼、29日仙台に出発予定、授業の遅れを心配されてもノンキなこと等。
北 I 6	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S23.5.2付(自筆)	葉書	1通	仙台市中島町46岡崎方	4.29仙台到着の報告、仙台の印象、昨日(5.1)豊と再会、下宿が定まらぬこと、医学部の勉強、仙台の自然等。(岡崎隆方は杜夫の下宿、『齋藤茂吉全集第36巻』(P.41))
北 I 7	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S23.5.6付(自筆)	葉書	1通	仙台市中島町46岡崎方	4月に松本から仙台へ送った荷物が届きお礼、授業、近況、松本懐古等。
北 I 8	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S23.9.10(推定)	葉書	1通	世田谷区代田(茂吉の住所印)	7月の松本行でのピンポン合宿、ストーム等、帰京時の情況、インターハイの結果、帰仙の準備等。
北 I 9	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S23.10.26(推定)	葉書	1通	仙台市支倉通一 山本和方	昭和23.10.12～10.17の密行(「松高記念祭」)の折の宿泊御礼と内緒のお願い。仙台で豊と会い元気なこと、製図が忙しいと言っていたこと等。
北 I 10	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S24.1.年賀状	葉書	1通	世田谷区代田(茂吉の住所印)	謹賀新年、12.23仙台で発熱、その後28日夜帰京したこと、医学部は15・6日から始まるからそろそろ帰仙すること、寮時代の下級生のこと、松本懐古等。
北 II 1	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S24.1.19(受領)	ワラ半紙	1通	郵便書簡ではなく、立ち寄った友人かブルンネンのところでワラ半紙を買い、急ぎ書きとめ、誰かに手渡しを依頼し、與曾井湧司の手元に届いた書簡と考えられる。	本書簡(手紙)では、今回の松本行は松本の教授や友人に相談したいことがあつての密行であること、與曾井・松崎の両宅を訪問する積りであつたが、友人が来たり飲みすぎたりの理由で訪問できずに心苦しく帰仙すること、今回の松本密行を秘密にしておいてほしいこと、今後伺う旨、医学の勉強への決意等。
北 III 1	北杜夫書簡(與曾井湧司 奥様宛)	北杜夫	S41.6.14(消印)	葉書	1通	世田谷区松原	テレビ「私の秘密」(昭和41)に杜夫は恩師松崎一と出演した。與曾井夫妻が同行したと推察する。
北 III 2	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫夫人	S44.10(消印)	葉書	1通	世田谷区松原	杜夫のヨーロッパ旅行中、不在のところに届いた贈り物への御礼(喜美子夫人)。
北 III 3	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫夫人	S47.10(推定)	葉書	1通	世田谷区松原	杜夫のヨーロッパ旅行中、不在のところに届いた贈り物への御礼(喜美子夫人)。
北 III 4	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S48.12.3	絵葉書	1通	世田谷区松原	虎とスキーの絵葉書にて信州の味の御礼、老化のこと等。
北 III 5	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S49.10	絵葉書	1通	世田谷区松原	笛吹く少年の絵葉書にて信州の味の御礼、今後の御放免等。
北 III 6	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S55.12.8	葉書	1通	世田谷区松原	お化けのイラスト杜夫専用葉書にて信州の味への御礼、「九月からソウ病」等。
北 III 7	北杜夫書簡(與曾井湧司宛)	北杜夫	S41～47(不明)	葉書	1通	世田谷区松原	7円葉書にて信州の香の御礼、知人松崎逝去の寂しさ等。
北 茂吉 IV 1	北杜夫書簡(茂吉書簡に寄書)	北杜夫 齋藤茂吉	S23.2.24	葉書	1通	世田谷区代田	茂吉が與曾井に宛てた葉書に杜夫の寄書。無事帰京の報告、在松中のお礼、荷物のこと、3月下旬に松本へ行く等。(『齋藤茂吉全集36巻』書簡補遺9093)
北 茂吉 IV 2	北杜夫書簡(茂吉書簡に寄書)	北杜夫 齋藤茂吉	S23.4.23	葉書	1通	世田谷区代田	茂吉が與曾井に宛てた葉書に杜夫の寄書。無事帰京の報告、穂高の印象、豊との連絡等。(『齋藤茂吉全集36巻』書簡補遺9104)

四、書簡公開の方針

1 書簡一覧表の凡例（留意事項）

書簡の一覧表作成は次の方針による。

① 書簡一覧表の項目

項目は「資料番号」「表題（宛名）」「作成者」「作成年代」「形態」「数量」「差出元」「概要」と各項目を立て整理した。

② 資料番号

本論第三章「書簡一覧表」に付与した資料番号は、本論第二章「書簡の日付想察」に述べたように、まず書簡の発信時期（消印）及び書簡形式からⅠ～Ⅳ群に分類した。次に筆者が想察・推定した書簡の「作成年代」に基づき時系列で番号を付与した。資料番号は「作成者―群―作成年代番号」の順に筆者が付与したものである。

③ 書簡の表題

書簡の表題は総て「北杜夫書簡」とし宛名を括弧で示した。また、茂吉書簡に杜夫が寄せ書きした書簡については「茂吉書簡に寄書」と明記した。

④ 差出元

差出元は杜夫がどこで書簡を執筆したかを明記した。

⑤ 概要

概要は書簡内容の要点を簡潔に示し、夫人の書簡は括弧で明記した。また、茂吉書簡については『齋藤茂吉全集第三十六巻』の「書簡補遺」の番号を明記した。

2 書簡公開の凡例（留意事項）

書簡の公開は次の方針による。

① 書簡公開の構成

書簡公開は一書簡の表裏を一組とし、上段右側に書簡（葉書）の表面画像を載せ、上段左側に書簡（葉書）の裏面画像を載せた。また上段の画像に対応し、下段右側には表面の原文（消印）の活字化内容を載せ、下段左側には裏面の原文の活字化内容を載せた。「北―Ⅱ―1」は上段に原文画像、下段に活字化内容。

② 活字化

書簡（葉書）の活字化に際しては、可能な限り原文の字体及び表記を尊重した。表面は書簡の形態を隅付き括弧【】で示し、「住所」「宛名」「差出人住所」「差出人氏名」等原文に対応し行頭を揃えて示した。裏面は誤読を避ける箇所、改行が必要と思われる箇所以外原文を詰めて活字化した（原文の改行や余白等、杜夫の執筆時の意識や息づかいが画像参照）。

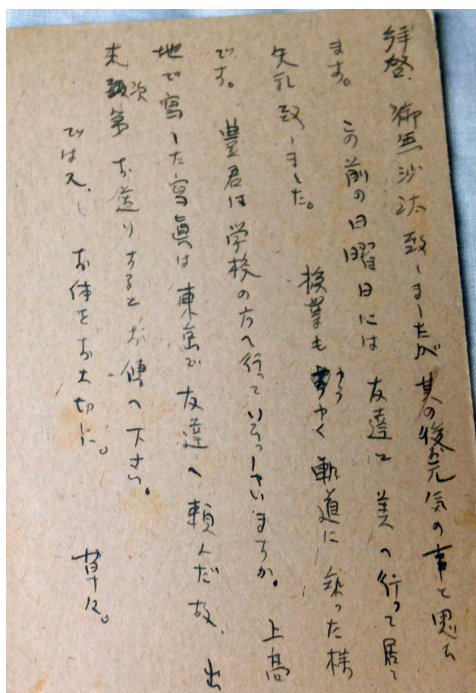
③ 原文の杜夫修正箇所

書簡の中には杜夫が修正をする際、塗潰しを加え修正した箇所がある。活字化に際しては塗潰し箇所を網掛けで示し、修正した部分を活字化した。また、茂吉の住所印の一字「茂」を「宗」に修正した箇所については、活字化に際して明記した。

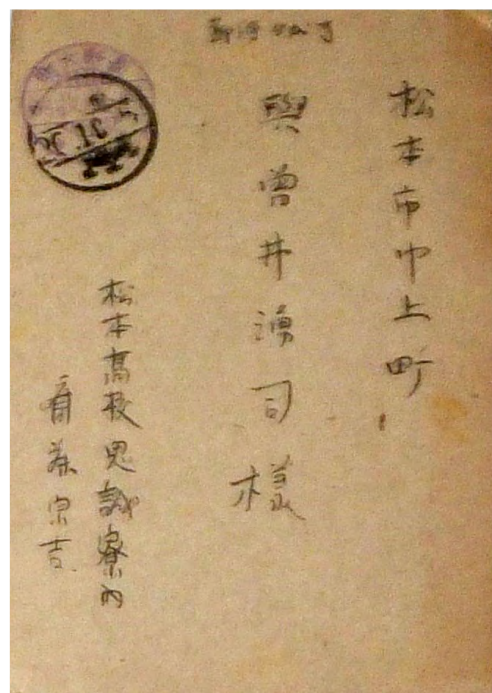
④ 消印及び執筆日時

消印は認識可能な部分は活字化し、困難な場合は「不明」と明記した。杜夫が日付を表記した「北―Ⅰ―6」「北―Ⅰ―7」はそのまま活字化した。また與曾井湧司が覚書きとして記入した日付は活字化の際、その旨を明記し参考とした。

五、書簡公開



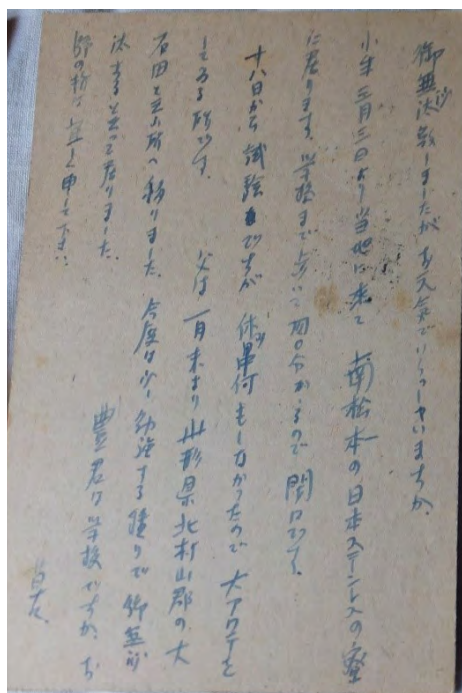
北-I-1 葉書(裏) 平成 27. 8. 8 筆者撮影



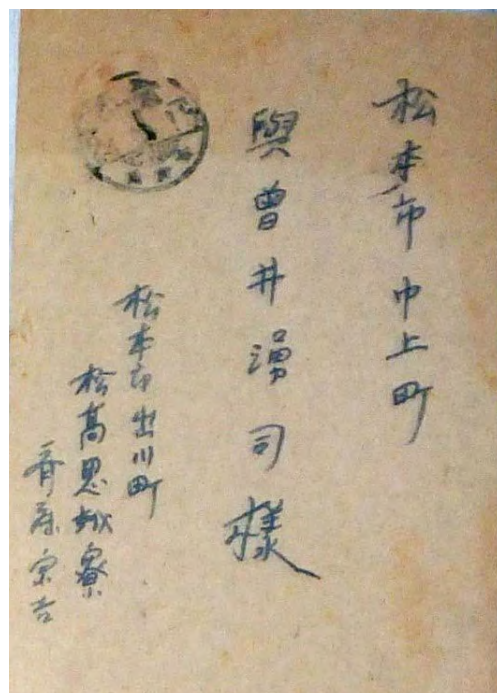
北-I-1 葉書(表) 平成 27. 8. 8 筆者撮影

拜啓、御無沙汰致しましたが其の後お元気の事と思ひます。この前
の日曜日には友達と美へ行つて居て失礼致しました。授業もやう
やく軌道に乗った様です。豊君は学校の方へ行つていらつしやいま
すか。上高地で寫した寫眞は東京で友達へ頼んだ故、出来次第お
送りするとお傳へ下さい。では又、お体をお大切に。草々。

【葉書】
松本市中上町
與曾井湧司 様
消印 20・10・5
松本高校思誠寮内
斎藤宗吉



北-1-2 葉書（裏）平成 27. 8. 8 筆者撮影



北-1-2 葉書（表）平成 27. 8. 8 筆者撮影

御無沙汰致しましたが、お元気です。いらつしやいますか。小生三月三日より当地に於て南松本の日本スチレンスの寮に居ります。学校まで歩いて四〇分かかるので閉口です。十八日から試験ですが、休み中何もしなかつたので大アワテをしてゐる所です。父は一月末より山形県北村山郡の大石田と云ふ所へ移りました。今度は少し勉強する積りで御無沙汰すると云つて居りました。豊君は学校ですか。お歸の折は宜しく申して下さい。草々。

【葉書】
松本市中上町
與曾井湧司 様
消印 不明
松本市出川町
松高思誠寮
齊藤宗吉

此の通り御手紙拜受しました。二十八日に当地に
 着きました。父も大分快方に向つて居りますが年のせ
 い相当長びく様子です。いまだ仕事も居るで
 状態は歌集の事を聞きましても全く見込がつか
 ないと言つて居ります。まだかゝんたりすると痛むと申し
 居ります。当地は東京より大分涼しい様で殊にこ
 り二三日梅雨模様で天候は夏をアツたけは寒い候
 です。不取敢御返事まで
 草々

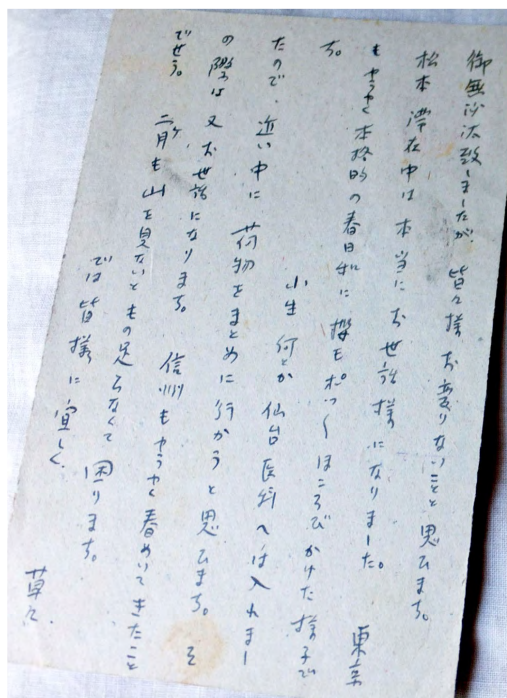
北-I-3 葉書(裏) 平成27. 8. 8 筆者撮影

長野県 松本市中上町
 與曾井湧司 様
 山形県北村山郡大石田町
 二藤部兵右衛門様方
 齊藤宗吉
 消印 7・6
 郵便は

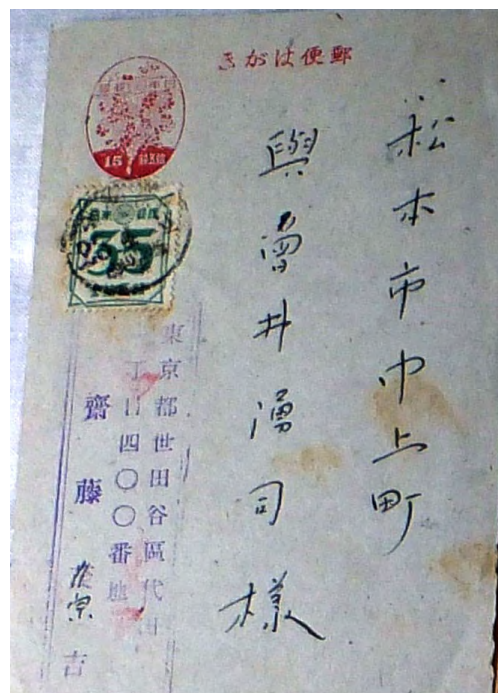
北-I-3 葉書(表) 平成27. 8. 8 筆者撮影

ごていねいな御手紙拜受しました。二十八日に当地に着きました。
 父も大分快方に向つて居りますが年のせいで相当長びく様子です。
 でまだ仕事もして居らない状態で歌集の事を聞きましたら全く見込
 がつかないと言つて居りました。まだかゝんたりすると痛むと申し
 て居ります。当地は東京より大分涼しい様で殊にこの二・三日梅雨模
 様の天気で夏シャツだけでは寒い程です。不取敢御返事まで 草々

【葉書】
 長野県松本市中上町
 與曾井湧司 様
 消印 7・6
 山形県北村山郡大石田町
 二藤部兵右衛門様方
 齊藤宗吉



北-I-4 葉書(裏) 平成27. 8. 8筆者撮影



北-I-4 葉書(表) 平成27. 8. 8筆者撮影

御無沙汰致しましたが、皆様お变りないことと思ひます。松本滞在中は本当にお世話様になりました。東京もやうやく本格的の春日和に櫻もポツ／＼ほころびかけた様子です。小生何とか仙台医科へは入れましたので、近い中に荷物をまともに行かうと思ひます。その際は又お世話になります。信州もやうやく春めいできたことでせう。二ヶ月も山を見ないともの足らなくて困ります。では皆様に宜しく。草々。

【葉書】
松本市中上町
與曾井湧司 様
消印 不明
東京都世田谷區代田
一丁目四〇〇番地
齋藤■宗吉
(茂吉の住所印を使用し「茂」を消して「宗」のみ書く。筆者付記)

前略。まだ東京でモサくしてゐます。やっと荷物を
 発送したから——松本から送った奴無事とどきました。本
 当に有難うございました。明後二十九日に立つ豫定です。豊
 君にも連絡しております。それから外の荷物も輸送賃
 分りしたらどうかお知らせ願ひます。仙台の友達からは、みんな心配してたり、講義が朝8時
 時から夕5時まででノートのブランクが大変だのと言つてきます。でもノンキなもの
 です。

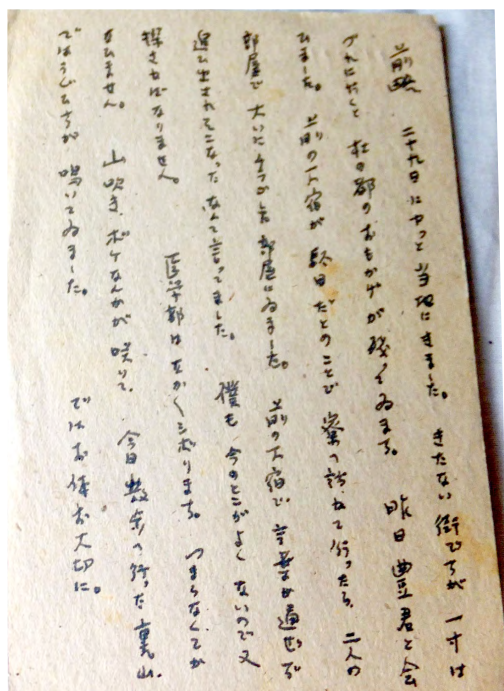
北-I-5 葉書(裏) 平成27. 8. 8筆者撮影

郵便はがき
 松本市中上町
 與曾井湧司 様
 東京都世田谷區代田
 一丁目四〇〇番地
 齋藤 宗吉

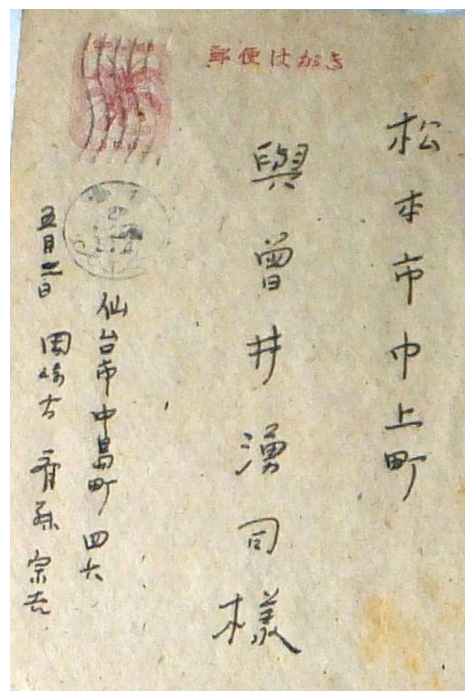
北-I-5 葉書(表) 平成27. 8. 8筆者撮影

前略。まだ東京でモサくしてゐます。やっと荷物を発送しました
 から——松本から送った奴無事とどきました。本当に有難うござい
 ました。明後二十九日に立つ豫定です。豊君にも連絡してありま
 す。それから外の荷物の輸送賃、分かりましたらどうかお知らせ願
 ひます。仙台の友達からは、みんな心配してゐるのだの。講義が朝8時
 から夕5時まででノートのブランクが大変だのと言つてきます。で
 もノンキなものです。では何れ又。

【葉書】
 松本市中上町
 與曾井湧司 様
 消印 4・28
 東京都世田谷區代田
 一丁目四〇〇番地
 齋藤 宗吉
 (茂吉の住所印を使用し「茂」を消して「宗」のみ書く。筆者付記)



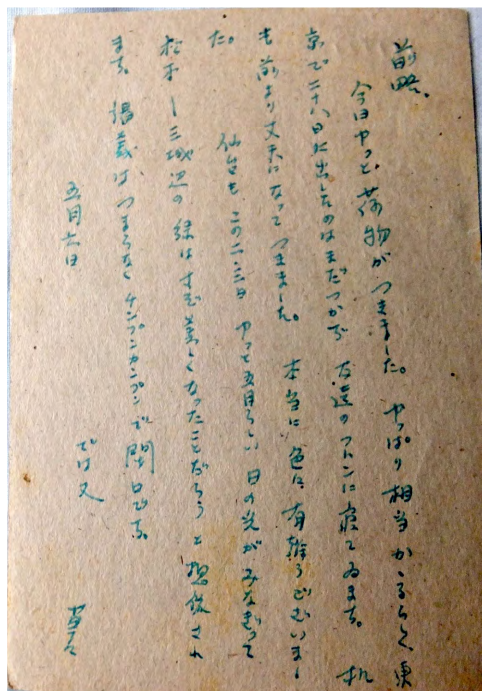
北-I-6 葉書（裏）平成27. 8. 8筆者撮影



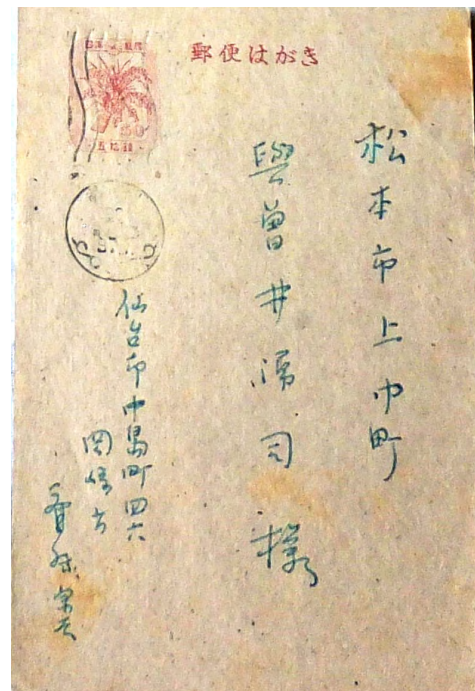
北-I-6 葉書（表）平成27. 8. 8筆者撮影

前略 二十九日はやっと当地にきました。きたない街ですが一寸は
づれに行くと杜の都のおもかげが残つてゐます。昨日豊君と会ひま
した。前の下宿が駄目だとのことで寮へ訪ねて行ったら、二人の部
屋で大いにチラかした部屋にゐました。前の下宿で言葉が通ぜず追
ひ出されそなたなんて言つてました。僕も今のところがよくないの
ので又探さねばなりません。医学部はをかくシボります。つまら
なくてかなひません。山吹きボケなんか咲いて、今日散歩へ行つ
た裏山ではうぐひすが鳴いてゐました。ではお体お大切に。

【葉書】
松本市中上町
與曾井湧司 様
消印 不明
仙台中島町四六
岡崎方 齊藤宗吉
五月二日



北-I-7 葉書（裏）平成 27. 8. 8 筆者撮影



北-I-7 葉書（表）平成 27. 8. 8 筆者撮影

【葉書】

松本市上中町

與曾井湧司 様

消印 不明

仙台市中島町四六

岡崎方

斎藤宗吉

前略

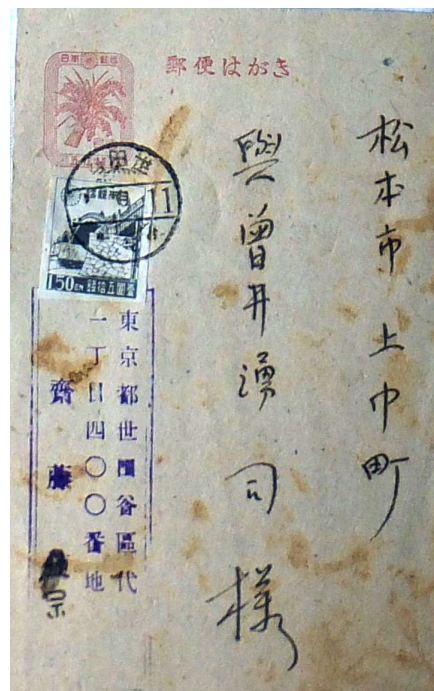
今日やつと荷物がつきました。やっぱり相当かゝるらしく、東京で二十八日に出したのはまだつかず友達のフトンに寝てゐます。机も前より丈夫になつてつきました。本当に色々有難うございました。仙台もこの二・三日やつと五月らしい日の光がみなぎつて松本——三城辺の緑はさぞ美しくなつたことだろうと想像されます。講義はつまらなくチンプンカンプンで閉口です。

五月六日

では又

草々

ちかり御無沙汰してしまひましたが、皆様お変わりございませんで
 せうか。豊君も、もう仙台へ行つてゐることと思ひますが、僕は明
 日立つ豫定で荷作りしてゐるところで、僕は明日立つ豫定
 で荷作りしてゐるところで。
 この由はとう／＼お空可なりには歸つてしまふ申譯ありませう。
 徳留で寝てしまふ思はぬ友達か尋ねてきたりしてとう／＼悔念を矢
 つてしまふ。十八日の朝二時頃、連続ストームで眠れない
 中に「出陣ダア」とかタイコを打ち出し、五時の汽車で選手と上
 京。富山を破つて、インターハイで卓球部創立以来二度目の勝利
 でした。東京は非常な残暑がきびしく、兄の赤んぼが盲腸に悩ま
 されて又学校へ遅れさうです。いづれ豊君とも会ふでせうからゆつ
 くりお便りします。

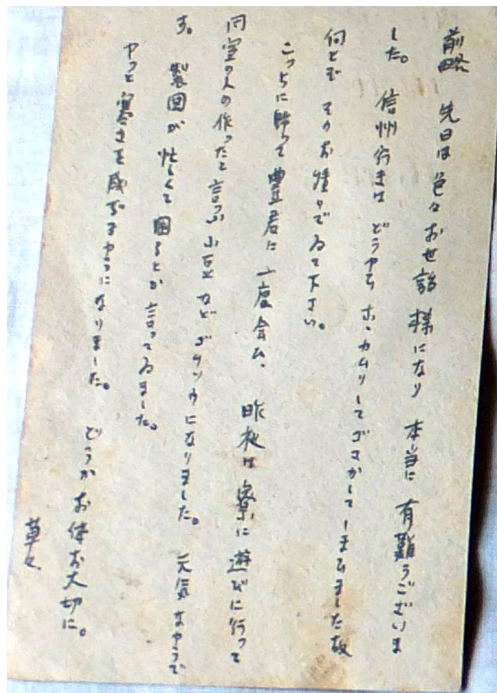


北-I-8 葉書（裏）平成 27. 8. 8 筆者撮影

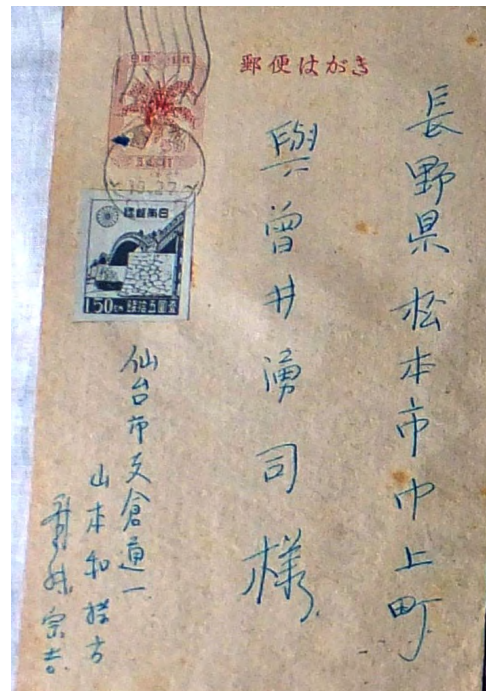
北-I-8 葉書（表）平成 27. 8. 8 筆者撮影

すっかり御無沙汰してしまひましたが、皆様お変わりございませんで
 せうか。豊君も、もう仙台へ行つてゐることと思ひますが、僕は明
 日立つ豫定で荷作りしてゐるところです。この間はとう／＼お寄り
 せずに歸つてしまつて申譯ありませんでした。練習で疲れてしま
 ひ、思はぬ友達か尋ねてきたりしてとう／＼機会を失つてしまひま
 した。十八日の朝二時頃、連続ストームで眠れない中に「出陣
 ダア」とかタイコを打ち出し、五時の汽車で選手と上京。富山を
 破つて、インターハイで卓球部創立以来二度目の勝利でした。東京
 は非常に残暑がきびしく、兄の赤んぼが盲腸になつたりして又学校
 へ遅れさうです。いづれ豊君とも会ふでせうからゆつくりお便りし
 ます。

【葉書】
 松本市上中町
 與曾井湧司 様
 消印 一部不明
 東京都世田谷區代
 一丁目四〇〇番地
 齋藤 宗
 （茂吉の住所印を使用し「茂」を消して「宗」のみ書く。筆者付記）



北-I-9 葉書（裏）平成27. 8. 8筆者撮影

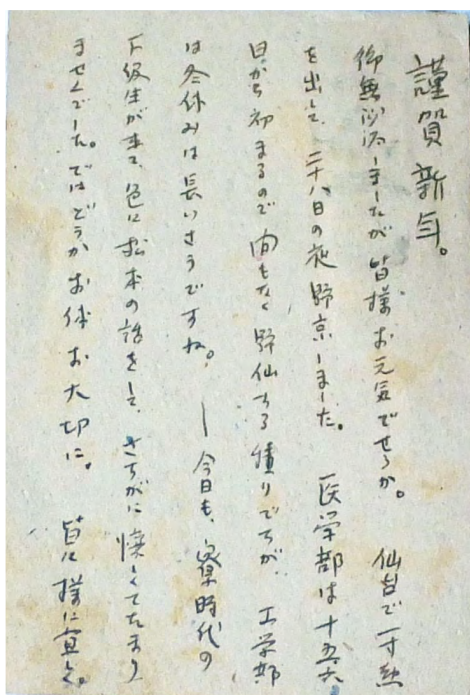


北-I-9 葉書（表）平成27. 8. 8筆者撮影

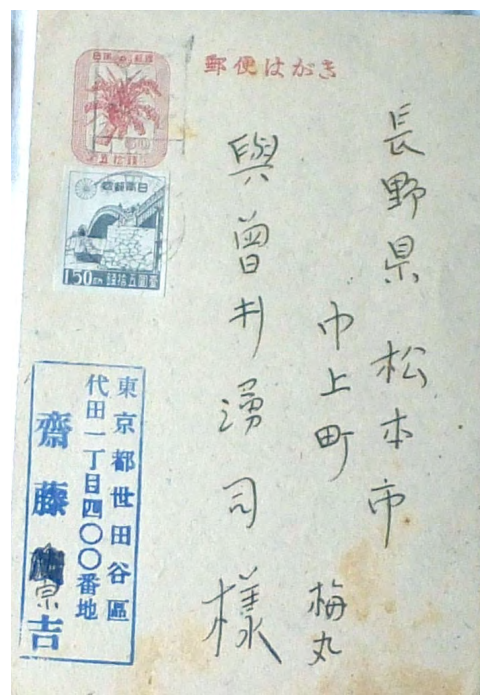
前略 先日は色々お世話様になり本当に有難うございました。信州
行きはどうやらホッカムリしてごまかしてしまひました故何とぞそ
のお積りでみて下さい。こつちに歸つて豊君に一度会ひ、昨夜は寮
に遊びに行つて同室の人の作つたと言ふ小豆などゴチソウになりま
した。元気なやうです。製図が忙しくて困るとか言つてゐました。
やつと寒さを感じてるやうになりました。どうかお体をお大切に。

草々

【葉書】
長野県松本市中上町
與曾井湧司 様
消印 10・27
仙台市支倉通一
山本和様方
斎藤宗吉



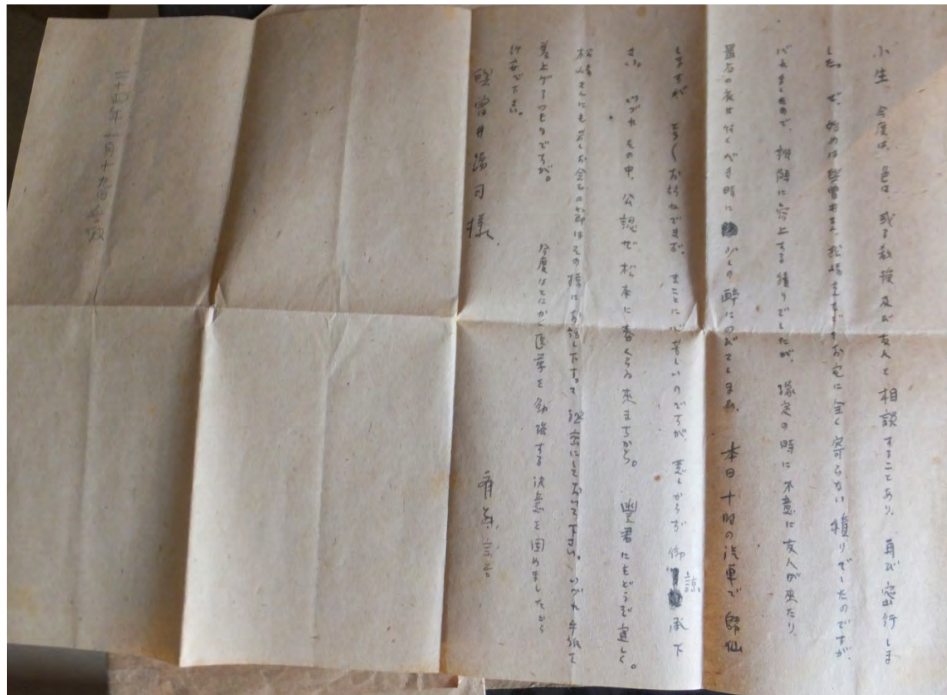
北-I-10 葉書(裏) 平成27. 8. 8筆者撮影



北-I-10 葉書(表) 平成27. 8. 8筆者撮影

謹賀新年。
御無沙汰しましたが皆様お元気でせうか。仙台で一寸熱を出して、二十八日の夜歸京しました。医学部は十五・六日から初まるので間もなく歸仙する積りですが、工学部は冬休みは長いさうですね。――
今日も、寮時代の下級生が来て色々松本の話をして、さすがに懐しくてたまりませんでした。ではどうかお体お大切に。皆々様に宜しく。

【葉書】
長野県松本市
中上町 梅丸
與曾井湧司 様
消印 不明
東京都世田谷區
代田一丁目四〇〇番地
齋藤■宗吉
(茂吉の住所印を使用し「茂」を消して「宗」のみ書く。筆者付記)

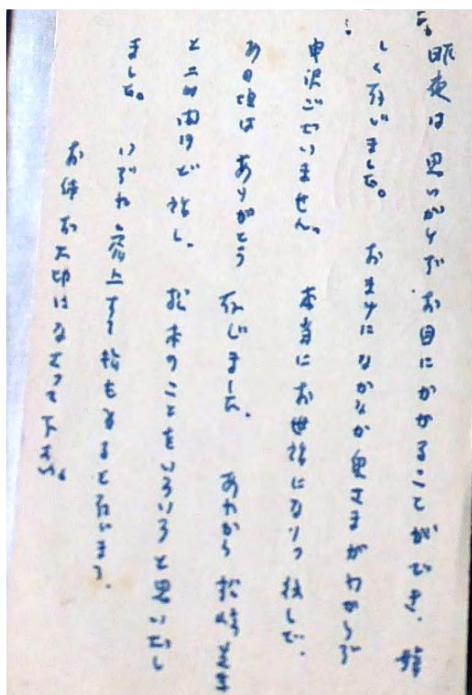


北一Ⅱ-1 フラ半紙書簡 平成 27. 8. 8 筆者撮影

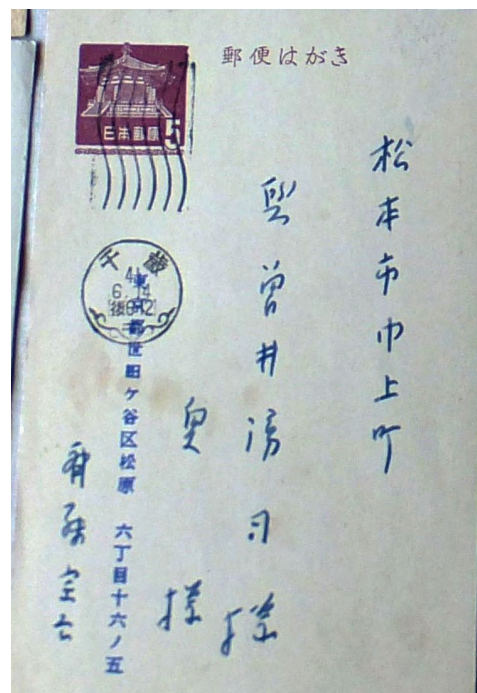
小生、今度は、色々、或る教授及び友人と相談することがあり、再び密行しました。で、始めは與曾井さん、松崎さんなどのお宅に全く寄らない積りでしたが、バれましたので、辨解に参上する積りでしたが、豫定の時に不意に友人が来たり、最右の夜は行くべきときに■少しの酔いのびてしまひ、本日十時の汽車で歸仙しますが、とう／＼お訪ねできず、まことに心苦しいのですが、悪しからず御■諒承下さい。いづれその中、公認で松本に春くらゐ来ますから。豊君にもどうぞ宜しく。松崎さんにも若しお会ひの節はそ様にお話し下すつて秘密にしておいて下さい。いづれ手紙を差上げるつもりですが。今度はとにかく医学を勉強する決意を固めましたから御安心下さい。 齊藤宗吉

與曾井湧司 様

二十四年一月十九日受領（書簡左上方に與曾井湧司筆と考えられる鉛筆書き、筆者記）



北一Ⅲ-1 葉書（裏）平成 27. 8. 8 筆者撮影



北一Ⅲ-1 葉書（表）平成 27. 8. 8 筆者撮影

【葉書】

松本市巾上町

與曾井湧司 様

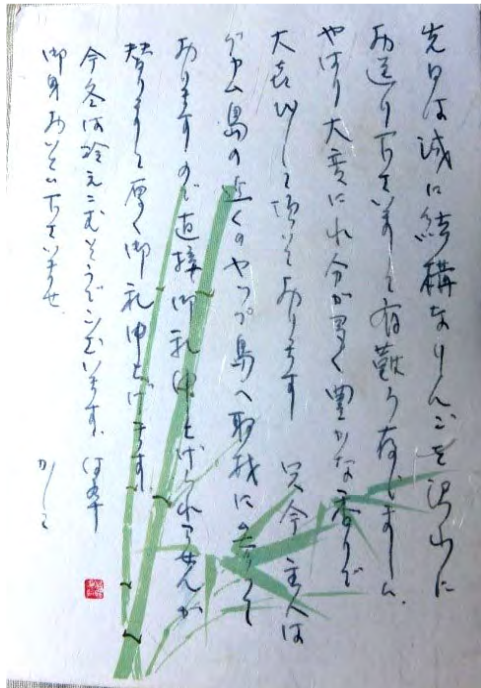
奥 様

消印 千歳 41・6・14

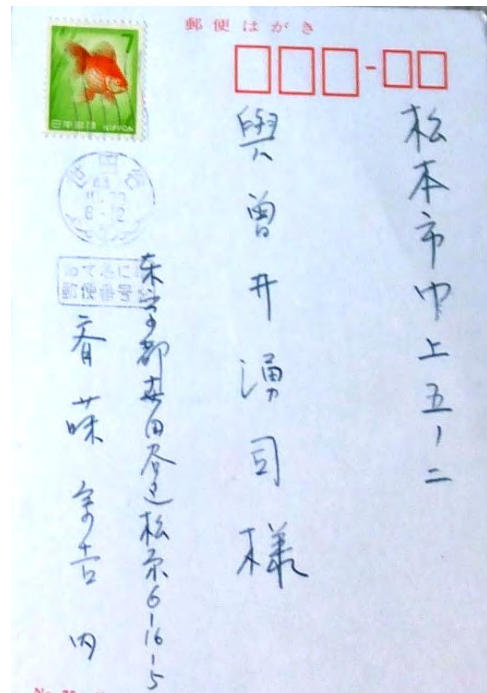
東京都世田谷区松原六丁目十六ノ五

齋藤宗吉

昨夜は思いがけずお目にかかることができ、嬉しく存じました。おまけになかなか奥さまがわからず申訳ございません。本当にお世話になりました。あけから松崎先生と二時間ほど話し、松本のことをいろいろと思い出しました。いづれ参上する折もあると存じます。お体大切になさってください。



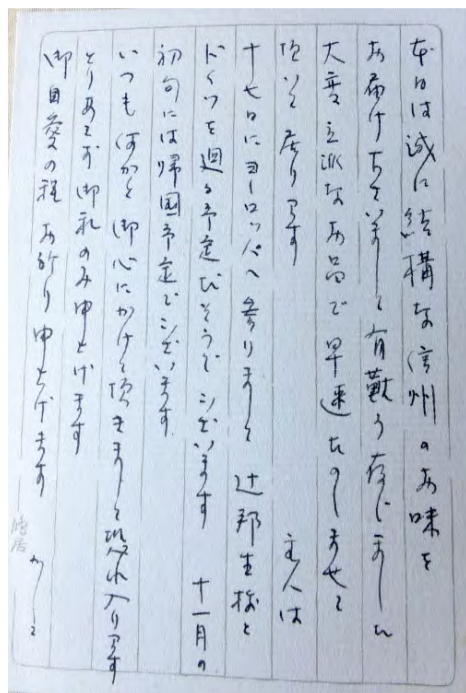
北一Ⅲ-2 葉書（裏）平成 27. 8. 8 筆者撮影



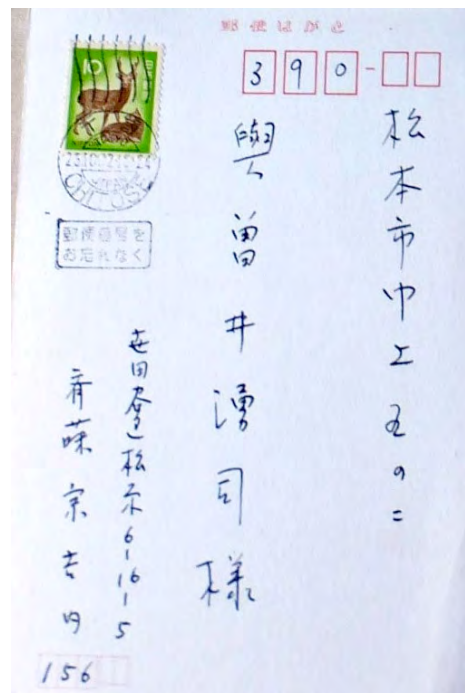
北一Ⅲ-2 葉書（表）平成 27. 8. 8 筆者撮影

先日は誠に結構なりんごを沢山にお送り下さいまして有難う存じました。やはり大変に水分が多く豊かな香りで大喜びして頂いております。只今主人はグアム島の近くのヤップ島へ取材に参っておりますので直接御礼申し上げられませんが替りまして厚く御礼申し上げます。今冬は冷えこむそうでございます。何卒御身おいとくださいませ かしこ

【葉書】（喜美子夫人書簡）
松本市中上五ノ二
與曾井湧司 様
消印 44・10
東京都世田谷区松原6-16-5
齊藤宗吉 内



北一Ⅲ-3 葉書(裏) 平成 27. 8. 8 筆者撮影



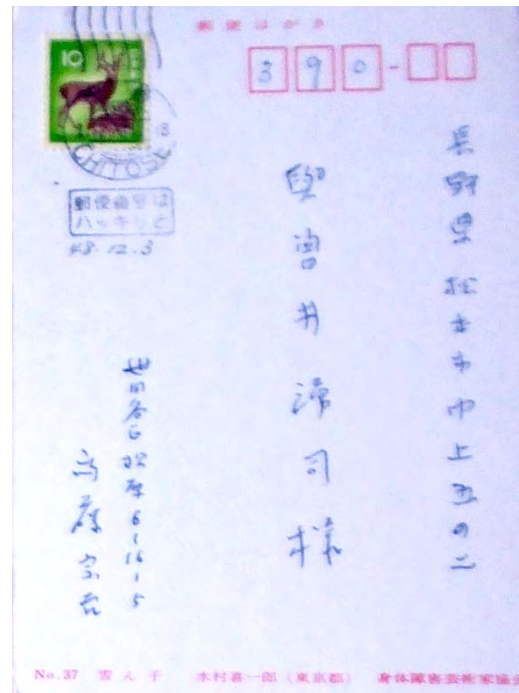
北一Ⅲ-3 葉書(表) 平成 27. 8. 8 筆者撮影

本日は誠に結構な信州のお味をお届け下さいまして有難う存じました 大変立派なお品で早速たのしませて頂いて居ります 主人は十七日にヨーロッパへ参りまして辻邦生様とドイツを廻る予定だそうでございます 十一月初旬には帰国予定でございます いつも何かと御心にかけて頂きまして恐れ入ります とりあえず御礼のみ申し上げます 御自愛の程お祈り申し上げます かしこ

【葉書】(喜美子夫人書簡)
〒390
松本市中上五の二
與曾井湧司様
消印 不明
世田谷区松原 6-16-5
斉藤宗吉 内 156



北一Ⅲ-4 葉書（裏）平成 27. 8. 8 筆者撮影



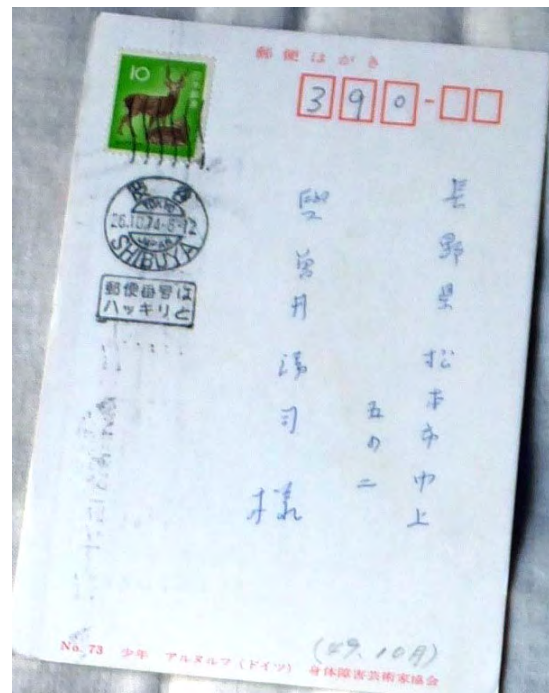
北一Ⅲ-4 葉書（表）平成 27. 8. 8 筆者撮影

ご無沙汰しております。
このたびは懐しい信州
の味をお送り頂き、
まことに有難うございました。
小生、老化いちじるしく、
與曾井さんにはなにとぞいつまでもお元気
ならんことを祈ります

【虎とスキー絵葉書】
〒390
長野県松本市巾上五の二
與曾井湧司 様
消印 不明 48・12・3（湧司鉛筆字と察する、筆者付記）
世田谷区松原 6—16—5
齋藤宗吉



北一Ⅲ-5 葉書（裏）平成 27. 8. 8 筆者撮影



北一Ⅲ-5 葉書（表）平成 27. 8. 8 筆者撮影

【笛吹く少年絵葉書】

〒390

長野県松本市中上五の二

與曾井湧司 様

消印 不明 49・10（右下湧司鉛筆字、筆者付記）

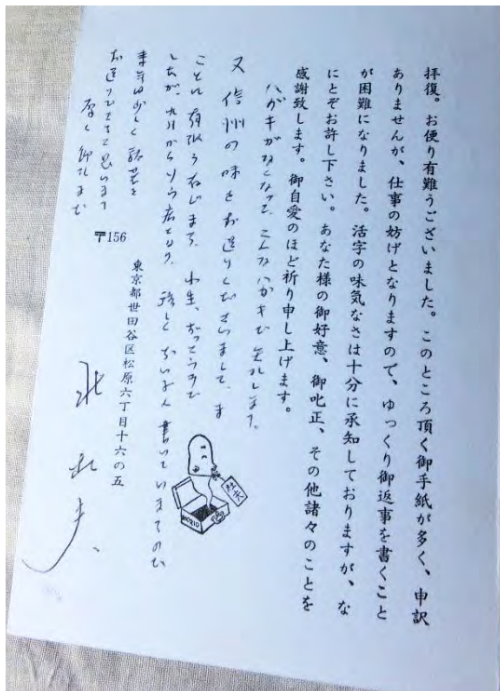
お便り有難うございました。

あなた様のご健勝をお祈り申し上げます。（冒頭二行、郵便番号、住所は活字印刷、一行目は杜夫自ら線を引き消している。筆者記）

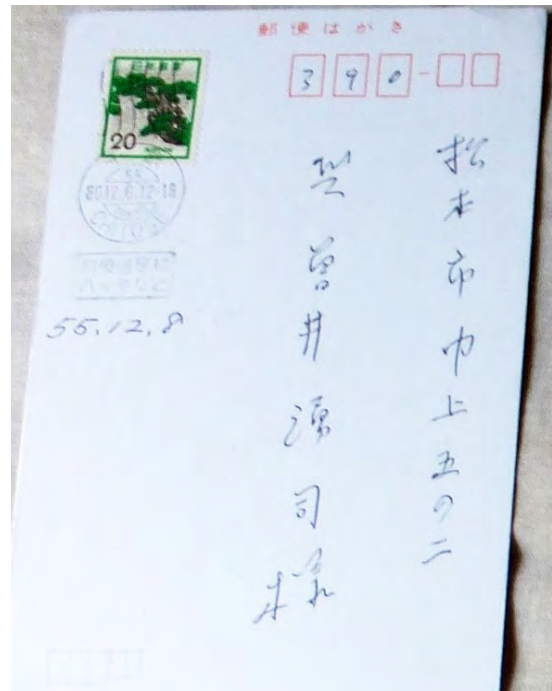
ご無沙汰いたしております。このたびはまた信州の味をお送り頂き、たいへん有難うございました。いつも恐縮ですので、今後はなにとぞ御放免くださいませ。とりあえず厚く御礼まで

156 東京都世田谷区松原六の十六の五

齋藤 宗吉



北一Ⅲ-6 葉書(裏) 平成 27. 8. 8 筆者撮影



北一Ⅲ-6 葉書(表) 平成 27. 8. 8 筆者撮影

【お化けのイラスト杜夫専用葉書】

〒390

松本市中上五の二

與曾井湧司 様

消印 不明 55・12・8 (切手消印の下湧司鉛筆字、筆者付記)

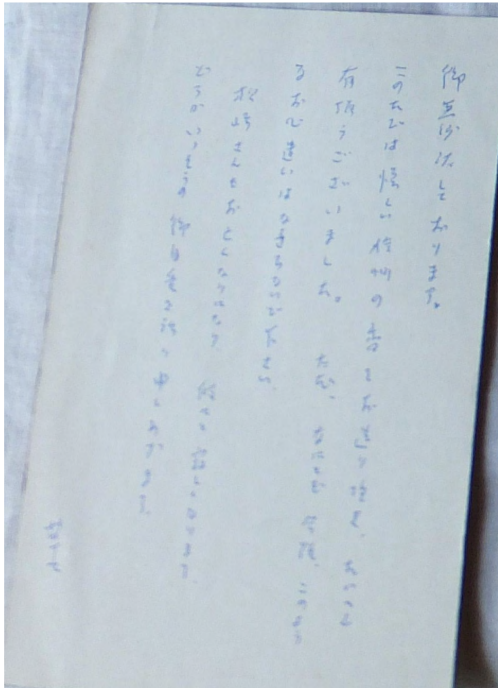
拝復。お便り有難うございました。このところ頂く御手紙が多く、申訳ありませんが、仕事の妨げとなりますので、ゆっくり御返事を書くことが困難になりました。活字の味気なさは十分承知しておりますが、なにとぞお許しください。あなた様の御好意、御叱正、その他諸々のことを感謝致します。御自愛のほど祈り申し上げます。

(冒頭五行、郵便番号、住所は活字印刷、筆者付記)

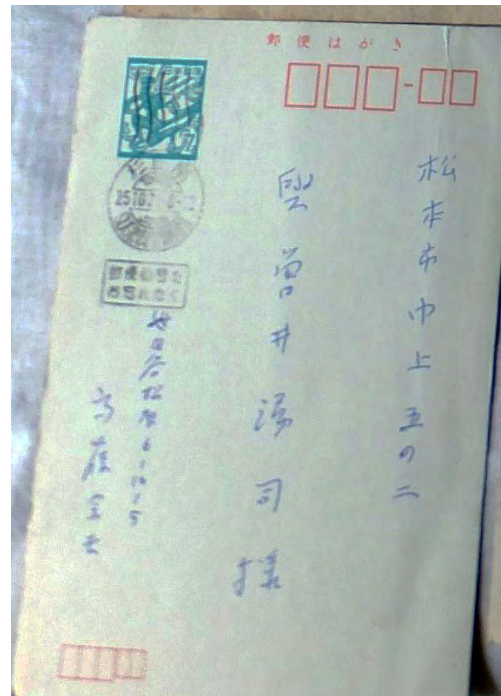
ハガキがなくなつて、こんなハガキで失礼します。又信州の味をお送りくださいませ。まことに有難う存じます。小生、ずっとウツでしたが、九月からソウ病となり、珍しくずいぶん書いていますので来年は少しく訪花をお送りできると思います 厚く御礼まで

〒156 東京都世田谷区松原六丁目十六の五

北杜夫



北一Ⅲ-7 葉書（裏）平成 27. 8. 8 筆者撮影



北一Ⅲ-7 葉書（表）平成 27. 8. 8 筆者撮影

【葉書】

松本市巾上五の二

與曾井湧司 様

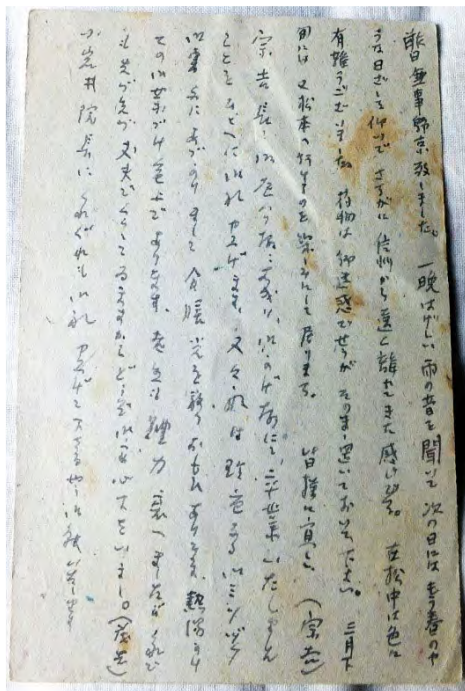
消印 不明

東京都世田谷区松原 6-16-5

斎藤宗吉

御無沙汰しております。このたびは懐しい信州の香をお送り頂き、
たいへん有難うございました。ただ、なにとぞ今後、このようなお
心遣いはなさらないでください。松崎さんもお亡くなりになり段々
と寂しくなります。どうかいつその御自愛を祈り申し上げます

草々



北茂吉-IV-1 葉書（裏）平成 27. 8. 8 筆者撮影



北茂吉-IV-1 葉書（表）平成 27. 8. 8 筆者撮影

【葉書】

長野県松本市中上町
與曾井湧司 様

【消印】 千歳 23・2・24

東京都世田谷區代田

一丁目四〇〇番地

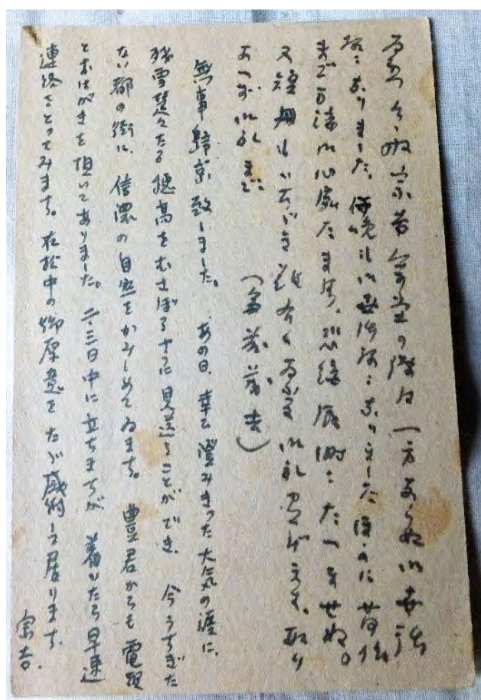
齋藤茂吉

参照「書簡四、補遺 昭和二十三年、九〇九三」（『齋藤茂吉全集第三十六卷』（P.839））

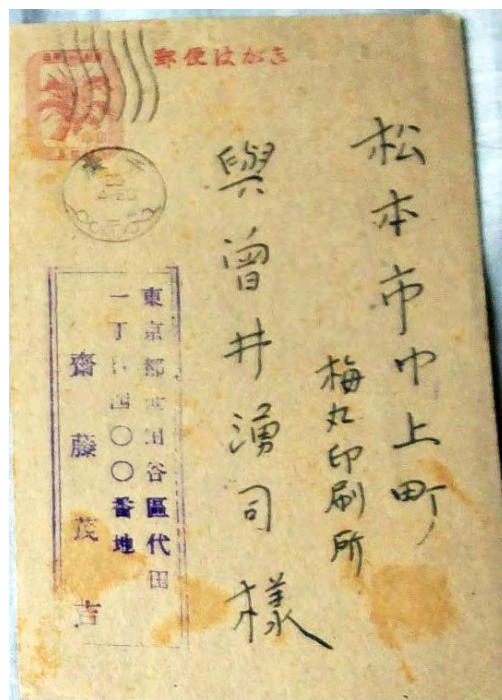
昨日無事歸京致しました。一晚はげしい雨の音を聞いて次の日にはもう春のやうな日ざしを仰いでさすがに信州から遠く離れてきた感じでした。在松中は色々有難うございました。荷物は御迷惑でせうがそのまゝ置いておいて下さい。三月下旬には又松本へ行けるのを楽しみにして居ります。皆様に宜しく（宗吉）

宗吉長々御厄介様に相成り、御かげ様にて卒業いたしましたことをひとへに御禮申上げます、又今般は珍重なる御ミソツケ御惠與にあづかりまして食膳光を放つおもひあります、熱湯かけての御茶づけ無上であります、老生も體力衰へましたがそれでも先ず先ず丈夫でくらしてゐますからどうぞ御安心下さいまし。（茂吉）

小岩井院長にくれぐれも御礼申上げて下さるやう御願いたします



北茂吉-IV-2 葉書（裏）平成 27. 8. 8 筆者撮影



北茂吉-IV-2 葉書（表）平成 27. 8. 8 筆者撮影

【葉書】

松本市中上町

梅丸印刷所

與曾井湧司 様

【消印】千歳 23・4・23

東京都世田谷區代田

一丁目四〇番地

齋藤茂吉

参照「書簡四、補遺 昭和二十三年、九一〇四」（『齋藤茂吉全集第三十六卷』（PP.842-843））

拜啓今般宗吉参堂の際は一方ならぬ御世話になりました。□「不明」晩も御世話様になりましたほかに荷作まで萬端御心慮たまはり、恐縮感謝にたへませぬ。又短冊もいたゞき難有く拜受御禮申上げます。取りあへず御禮まで、（齋藤茂吉）

無事歸京致しました。あの日、幸ひ澄みきった大氣の涯に、殘雪楚々たる穂高をむさぼるやうに見送ることができ、今うすぎたない都の街に、信濃の自然をかみしめてゐます。豊君からも電報とおはがきを頂いてありました。二・三日中に立ちますが着いたら早速連絡をとつてみます。在松中の御厚意をただ感謝して居ります。

宗吉

六、書簡の解釈及び文学的価値

筆者が閲覧した與曾井湧司宛書簡、全二十三通（第一章「1書簡との出会い」に述べた茂吉書簡五点を含む）のうち、杜夫の松本時代に関連し執筆された書簡は、I群十点、II群一点、IV群二点の全十三点である。本章ではこれに茂吉書簡の三点（『齋藤茂吉全集第三十六巻』『書簡補遺』の「九〇・三」「九〇・八六」「九〇・九一」）を参考資料として加え、全十六点の書簡を中心に杜夫の松本時代の與曾井湧司宛書簡の解釈を進め、その後本書簡の文学的価値について述べていくとする。以下にその茂吉書簡三点を引用する。

昭和二十二年

九〇・二二（一月八日 松本市中〔ママ〕上町 與曾井湧司様
大石田二藤部方より（はがき）

恭賀新年 昨年ちゅうは宗吉萬端御世話様に相成りました。今年もどうぞよろしく御願いたします。三年生からは下宿せねばならぬといたしますと、又松崎様にも御骨折ねがはねば相成ませんが目下の三年の方の下宿のよい處があればそこを頼むやうに申してやりました、頓首（P.812）

昭和二十三年

九〇・八六（一月一日 松本市中〔ママ〕上町 與曾井湧司様
代田自宅より（はがき）

拜啓今般特別の御芳情によりよき下宿御世話下さいましたよし何とも忝く御禮申し上げます。三年間怠けましたので受驗

もあやぶまれますが、それまで出来るだけ勉強させたいと存じますので特別に上等下宿のこと感謝いたしております。なほ時々御監督御願いたしますどうぞまだ小僧ですから 御禮迄 頓首（P.837）

昭和二十三年

九〇・九一（二月十二日 松本市中〔ママ〕上町三八七 與曾井湧司様 代田自宅より（はがき）

拜啓今般宗吉のために小岩井院長に御たのみ下さいまして大に助かりました彼も入試近づき、三年間怠けましたのであわて、勉強してゐる風ですどうぞ御励まし下さい、院長様によろしく（P.839）

1 書簡の解釈

先の十六点の書簡は、時間的には松本高校一年時（「北―I―1」昭20・10・5）から東北大学一年時（「北―II―1」昭24・1・19）までの書簡であり、参考に同時期の茂吉書簡三点を加えている。主な形態は葉書（十五点）であるが、一通ワラ半紙の書簡（「北―II―1」）が入っている。

いずれの書簡も実際の杜夫の生活と時間的意識的なずれが少なく、杜夫がその時々思ったことや感じたこと、見聞きたり体験したりしたことをありのままに直接的、未整理のまま断片的に書き綴ったものと理解できる。書簡に使用される言葉は、当時の杜夫が日々の生活の中でごく普通に使用していたと考えられるような素朴な言葉や言い回しが自然に表現され、目の前の與曾井湧司に語りかけるように綴られている。それ故に、本書簡は極めて真実性や真率

性が高いと考えられる。

まずは十六点を執筆時期、内容から便宜上、松本高校在学中と東北大学在学中に大別し、時系列に沿ってそれぞれの内容について特徴的な傾向を指摘し、その背景を明らかにし書簡の解釈を進めていくとする。

(1) 松本高校在学中の書簡

松本高校在学中の書簡は時系列で以下の八点である。杜夫葉書、茂吉葉書、茂吉葉書に杜夫が寄書、と三種類が混在している。以下に資料番号と日付を列挙する（「與曾井湧司宛書簡一覧表」参照、茂吉葉書は資料番号に加えて「書簡補遺」番号を明記）。

- 1 北—I—1 (昭和20年10月5日)
- 2 北—I—2 (昭和21年3月3日以降上旬)
- 3 北—I—3 (昭和21年7月6日)
- 4 茂吉書簡補遺 9022 (昭和22年1月8日)
- 5 茂吉書簡補遺 9086 (昭和23年1月1日)
- 6 茂吉書簡補遺 9091 (昭和23年2月12日)
- 7 北茂吉—IV—1 (書簡補遺 9093、昭和23年2月24日)
- 8 北—I—4 (昭和23年4月上旬頃)

次に、昭和二十年から昭和二十三年四月までの主な出来事に資料八点を重ねて列挙する（出来事の詳細は拙稿「其の一」第一章参照）。

昭和二十年（松本高校一年）

昭和二十年、終戦の年は杜夫にとってまさに激動の年であった。

一月 松本高校合格、そのまま麻布中学動員先での勤労働員。

二月下旬 茂吉が山形に単身疎開。

五月 二十五日の空襲で青山の自宅が焼かれ一旦小金井の宇田家へ。

六月 十五日、単身松本へ、思誠寮南寮三号入寮。

二十四日、王ヶ鼻登頂、その後寮が閉鎖。

七月 二日～十日、山形の茂吉の元へ。

七月下旬 與曾井豊と上高地、西穂高岳へ。

八月 一日、松本高校入学式、その後大町アルミ工場へ動員。十五日、終戦。

二十八日～九月十二日再び山形の茂吉の元へ。

九月 二十日学校再開、思誠寮中寮二号入寮。

十二月 一日、思誠寮西寮入寮。食糧難のため一日で閉寮、学校はその後四か月休校。一旦帰京、宮尾家へ。その後茂太宅へ（杉並区）。

昭和二十一年（松本高校二年）

学校の休校を受けて杜夫は東京、山形、松本と生活の場を移していった。

一月 二十八日、山形上山、山城屋へ。

二月 十八日～二十日、大石田の茂吉の元へ（一度目）。

三月 学校再開、進級試験（三月十八日）。

北—I—2（昭和21年3月3日以降上旬）

四月 二年進級、西寮委員。

六月 食糧難、試験中止、夏休み。

二十八～八月二十三日、大石田の茂吉の元へ（二度目）。

北—I—3（昭和21年7月6日）

九月 学校再開、西寮総務。

昭和二十二年（松本高校三年）

茂吉書簡補遺 9022（昭和22年1月8日）

三学期、寮生活に沈滞ムード。

四月 寮を出て下宿（松本市県町北区、中野太郎江方）。

五月 卓球部主将、校友会運動部総務。インターハイ、駅伝出場。

夏休み 帰京、代田の家（昭和21・9・1茂太購入）で過ごす。

七月 十七日、茂吉から「この夏は勉強が宗吉には必要だ」（『齋藤茂吉全集第三十五巻』（P691）の書簡を受け取り、徐々に進路について想いをめぐらす。

（九月頃、随筆「六脚蟲の世界」執筆（松高校校友会誌「山脈」）

十月 十六日、「愛する宗吉よ」の茂吉書簡により動物学志望を断念、医学を志す。神経衰弱を克服しようと穂高岳を望む。

十一月 四日、「茂吉は輝子の用意した世田谷代田の二階建ての家に戻った」（『晩年茂吉』（P133）

（詩「寂寥」「停電哀歌」執筆）

十二月 若松館へ下宿（松本市若松町大久保方）を移す。

（詩「木枯」執筆）

（日記「十二月五日」執筆（『どくろのマンボウ青春記』）

昭和二十三年（松本高校三年）

一月 釜方（松本市大柳町一〇〇七）に下宿を移す。

二月 茂吉の命で小岩井外科病院（松本市大柳町）に住み受験

勉強。

茂吉書簡補遺 9091（昭和23年2月12日）

二十三日上京（代田）。

北茂吉Ⅳ—1（書簡補遺 9093、昭和23年2月24日）

三月 十三日東北大学医学部受験、合格。

北Ⅰ—4（昭和23年4月上旬頃）

四月 四日〜十八日、松本行。

十八日〜二十八日、代田にて身辺整理、仙台行の準備。

二十九日、仙台へ、岡崎方（仙台市中島町）に下宿。

八点の資料は暮らしの節目の心境、與曾井湧司への返事、茂吉の近況、茂吉の杜夫への気配り等が主な内容と考える。

「北Ⅰ—1」は、懂れていた王ヶ鼻、上高地、穂高岳と信州の自然を体験した杜夫が、慌しく入学式、終戦、山形行を終え、ようやく九月から学校が再開し、生活が落ち着いたかと思つた頃の書簡である。美ヶ原方面の昆虫採集を再開し、豊との「上高地で寫した寫眞」の現像についても伝えている。美ヶ原を「美」と象徴的省略的に表現しているところに、松本に馴染み期待を膨らませている心境を読み取ることができよう。

「北Ⅰ—2」は、昭和二十年十二月から翌二十一年三月にかけての休校の後、学校が再開して間もない頃の書簡である。新たな生活の場である「南松本の日本ステンレスの寮」（西寮）が「学校まで歩いて四〇分かかるので閉口です」と西寮にまだ慣れない様子や、進級試験の勉強をしてなく「大アワテ」をしている状況が伝えられている。また二月十八日から二十日にかけて大石田の茂吉を訪ねた時のことを受けて「父は一月末より山形県北村山郡の大石田と云ふ所

へ移りました。今度は少し勉強する積りで御無沙汰すると云って居りました」と茂吉の近況を伝えており、茂吉と與曾井湧司との関係への杜夫の気遣いが行間から読み取れる。

「北―I―3」は、茂吉の疎開先山形県大石田の聴禽書屋から、杜夫二度目の大石田行での茂吉の病状を伝える内容である。茂吉は昭和二十一年三月十三日より左肋膜炎に罹り五月上旬まで病臥の生活が続けていたが、夏ごろから徐々に病が癒えていった。書簡には冒頭「ごていねいな御手紙拜受しました」とあり、茂吉の病状を心配した與曾井湧司が送った書簡の返事であると察することができ、父も大分快方に向って居りますが年のせいで相当長びく様子です。まだまだ仕事もして居らない状態で歌集の事を聞きましたら全く見込がつかないと言って居りました。まだかゝんだりすると痛むと申して居ります」と、回復しつつある茂吉と一緒に暮らしていた杜夫の実感が率直に伝えられている。「北―I―2」と同様、杜夫の気遣いが行間から読み取れる。

「茂吉書簡補遺 9082」は大石田からの茂吉の書簡である。昭和二十二年松本高校三年となる杜夫の下宿を心配し「三年生からは下宿せねばならぬといたしますと、又松崎様にも御骨折ねがはねば相成ません」と先々に手を回している茂吉の親心が率直に伝えられている。

「茂吉書簡補遺 9086」は代田（昭和二十二年十一月四日に大石田から帰京し代田へ）からの茂吉の書簡である。昭和二十三年一月、杜夫が医学部合格に向け受験勉強の大詰めを迎えていた時期であった。茂吉は杜夫が集中して受験勉強できそうな下宿を決める際、與曾井湧司に頼み「今般特別の御芳情によりよき下宿御世話下さいましたよし何とも忝く御禮申し上げます」「三年間怠けましたので受験

もあやぶまれますが、それまで出来るだけ勉強させたいと存じますので特別に上等下宿のこと感謝いたしております」と重ねて感謝と安堵を伝えている。末尾の「なほ時々御監督御願いたしますどうぞまだ小僧ですから」に茂吉の熱心が現れている。

「茂吉書簡補遺 9091」も代田からの茂吉の書簡である。杜夫の受験勉強も追い込み時期を迎え、茂吉が依頼した與曾井湧司の心遣いもあり、小岩井外科病院内に部屋を借りることとなった。「今般宗吉のために小岩井院長に御たのみ下さいまして大に助かりました」と感謝を伝えている。

「北茂吉―IV―1」（書簡補遺 9093、昭和23年2月24日）は「書簡補遺 9091」の後日、昭和二十三年二月二十三日、受験のために一旦帰京した際、これまでの厚情に対し親子で感謝を伝える内容である。差出人茂吉の書簡であるが、裏面は前半に杜夫、後半に茂吉がそれぞれの自筆で執筆している。杜夫の「さすがに信州から遠く離れてきた感じです（中略）三月下旬には又松本へ行けるのを楽しみにして居ります」に既に松本を恋しく思う心情が行間に滲み出ている。一方茂吉は「今般は珍重なる御ミソツケ御惠與にあづかりまして食膳光を放つおもひあります、熱湯かけての御茶づけ無上であります」と贈答品の信州の味噌漬けに対していかにも茂吉らしい感想を付け加えている。文末には「小岩井院長にくれぐれも御礼申上げて下さるやう御願いたします」とそつ無く感謝を伝えている。

「北―I―4」は「小生何とか仙台医科へは入れました」と東北大学医学部合格を伝えている。「仙台医科へは」（傍点引用者）にやや消極的で他を類推させるような微妙なニュアンスが感じられる。杜夫は昭和二十三年三月、大学に合格してもすぐに仙台に行かず、四月四日から二週間ほどの松本行、代田での身辺整理の後、ようやく

四月二十九日に仙台に移動している。本書簡には「二ヶ月も山を見ないとも足らなくて困ります」とあり、「北茂吉—IV—1」と同様、信州の山を懐古し、恋しく思う心情が既に仙台行の前から表現されている。

以上、松本時代の書簡執筆の背景を明らかにしながら八点について内容を考察してきたが、この時期の與曾井湧司宛書簡の特徴として二点指摘しておきたい。

一点目は杜夫の心の奥に在るあたたかさや優しさ、誠実な人間性である。昭和二十年七月、初めての上高地滞在、西穂高岳登頂の道案内を引き受けてくれた豊の行為を杜夫は忘れない。二か月以上経った十月五日「豊君は学校の方へ行つていらつしますか。上高地で寫した寫眞は東京で友達へ頼んだ故出来次第お送りするとお傳へ下さい」（北—I—1）と記している。また、茂吉の情況や病状を心配する湧司への気配りを忘れない（北—I—2、北—I—3）。大石田での茂吉の近況や病状を率直に伝えており、当時の杜夫の細やかな優しさが現れていると指摘できる。

二点目は茂吉の短歌によって文学に覚醒していった当時の杜夫にとって、偉大な父の存在である。幼少の頃から雷親父と煙たがっていた存在が尊敬する対象になっていった時期であった（拙稿「其の一」〔其の二〕参照）。そして昭和二十二年十月十六日（松本高校三年）の茂吉の手紙で動物学志望を断念し、医学部合格に向かって勉強し、合格していった当時の杜夫であった。茂吉の杜夫への教育熱心さは拙稿「其の二」でも指摘したが、本書簡群「茂吉書簡補遺9022」〔茂吉書簡補遺9086〕〔茂吉書簡補遺9091〕〔北茂吉—IV—1〕等にも顕著に現れている。こうした教育熱心であり雷親父であり尊崇の対象であった茂吉と対峙しながら、松本時代の杜夫は與

曾井湧司と交際を深めていったと考えられる。

（2）東北大学在学中の書簡

東北大学時代の書簡は時系列で以下の八点である。茂吉葉書に杜夫が寄書、杜夫葉書、ワラ半紙の手紙と三種類が混在している。以下に資料番号と日付を列挙する（「與曾井湧司宛書簡一覽表」参照、茂吉葉書は資料番号に加えて「書簡補遺」番号を明記）。

- 1 北茂吉—IV—2 （書簡補遺9104、昭和23年4月23日）
- 2 北—I—5 （昭和23年4月27日）
- 3 北—I—6 （昭和23年5月2日）
- 4 北—I—7 （昭和23年5月6日）
- 5 北—I—8 （昭和23年9月10日）
- 6 北—I—9 （昭和23年10月26日）
- 7 北—I—10 （昭和24年1月年賀）
- 8 北—II—1 （昭和24年1月19日）

次に、昭和二十三年一月から昭和二十四年一月までの主な出来事に資料八点を重ねて列挙する（昭和二十三年十月までの出来事は本論第二章第一節参照、十一月以降昭和二十四年一月までの出来事は「杜夫年譜」及び「杜夫日記」等を参考に作成）。

昭和二十三年（東北大学一年）

昭和二十三年、東北大学入学の年は杜夫にとって松本への郷愁と懐古の年となった。

一月 一日、代田の家で家族そろって正月を迎える。

十一日、松本へ出発。松本市大柳町一〇〇七に下宿を移

す。

(詩「真夏の衝迫」執筆)

松本市大柳町小岩井外科病院に移る。

二十三日、上京する。

三月
十三日、仙台に行き、東北大学医学部を受験し、その後合格する。

(詩「斑雪」「帰ってくるものに」執筆)

四月
四日～十八日、松本行(一回目)。

十八日～二十八日、東京代田にて身辺整理、仙台行の準備。

北茂吉—IV—2 (書簡補遺 9104、昭和23年4月23日)

北—I—5 (昭和23年4月27日)

二十九日、仙台行。仙台市中島町(岡崎方)に下宿。

五月
北—I—6 (昭和23年5月2日)

北—I—7 (昭和23年5月6日)

三十日、太田方(仙台市北五番町一四二)の下宿へ移る。

六月
二十日、伊達宗雄方(仙台市支倉通一)の下宿へ移る。

二十七日、仙台から帰京する。

七月
十二日、松本行(二回目)。

十四日、卓球部合宿に参加。

十八日、友人と上京。友人二人宿泊。

二十日、卓球インターハイ観戦。富山に勝利(4—3)。

二十一日、友人帰る。

二十六日、茂吉と箱根へ(～八月三十日まで滞在)。

八月
二十八日、茂一発熱(39°)。

三十日、帰京。

九月

(詩「穂高を見る」⁽¹⁰⁾七月執筆)

北—I—8 (昭和23年9月10日)

十一日、仙台へ。

(詩「うすあをい岩かげ」「あの頃の歌」九月執筆)

十一日、朝、仙台発。夜九時半東京着。夜行で松本へ。

十二日～十七日、松本行(三回目)、松高記念祭に参加(與曾井宅に宿泊)。

十八日、帰京。

二十日、午後四時家を出、辻邦生のところへ、夜八時まで話す。午後九時十五分の汽車で帰仙。

二十七日～三十日、「怠惰」な「困った生活」がつづく。

〔杜夫日記〕(PP.224-225)

北—I—9 (昭和23年10月26日)

十一月
二日、「初めて原稿が売れた。クラブ社」〔杜夫日記〕

PP.225)

五日、「投稿雑誌『文学集団』6号に『あの頃の歌』が佳作として」掲載。〔杜夫日記〕(PP.226)

十日、「山登り」二十枚〔杜夫日記〕(P.227)

十七日、学校へ行かず「詩作とピンポン」〔杜夫日記〕

(P.229)

(詩「成長」⁽¹¹⁾「真紅の毒草」十一月執筆)

二日、「夜、ピンポンがやりたくなって寮へ(中略)」「狂詩」を二ページばかり書く。〔杜夫日記〕(P.230)

十二月

四日、「またスランプ」〔杜夫日記〕(P.232)

五日、「親父が死んだゆめを見た」〔杜夫日記〕(P.233)

六日、「五頁ばかり」「狂詩」執筆。〔杜夫日記〕(P.233)

昭和二十四年（東北大学一年）
一月

北Ⅰ—10 （昭和24年1月年賀）

七日、「夜、新宿で辻と会い城作と「シベリア物語」を爪先立って見る。期待以下」（「杜夫日記」(P.240)）

十三日、松本行（四回目）。「松本の空気は生理的なノスタルジアを感じさせる」（「杜夫日記」(P.242)）

十七日、帰京、その足で仙台へ（推定）。

北Ⅱ—1 （昭和24年1月19日受領）

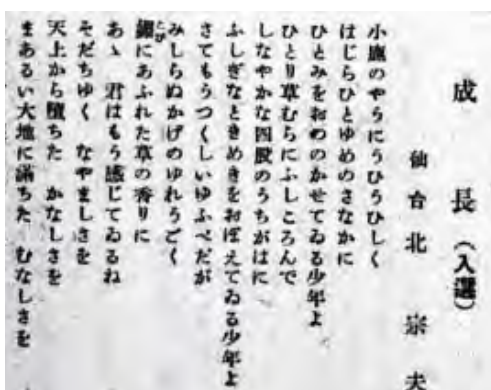
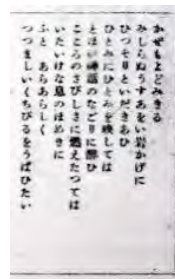
二十日、「仙台は予想外に寒」（「杜夫日記」(P.245)）

二十八日、日記に断章を書き連ねる。

二十三日、「その後のことをひとまとめに書く。或る日、本屋で竹山通雄「失われた青春」をめくっていた（中略）僕はギョッした。この寮という「魔の山」に育った……云々という文句があるのだ（中略）（註。「狂詩」が旧制高校を「魔の山」のパロディとして書かれていたからである。）発熱（中略）幻覚のように美しい山上の夏の夜空の夢をみた（中略）ギリシャ神話の愛の誕生を書きつづった。（中略）（註。この文章のちに「少年」の、更には「幽霊」の末尾になった。）」（「杜夫日記」(P.234-235)）

二十四日、「人間と自然、のつぴきならず、微笑んだり、泣いたりする」（「杜夫日記」(P.237)）

二十七日、「やっと米搬出許可証を手に入れる。キップを買う。明日は帰省」（「杜夫日記」(P.238)）



北宗夫「成長」

平成 29. 9. 2 筆者撮影

北宗夫「穂高を見る」「うすあをい岩かげ」

平成 29. 9. 2 筆者撮影

東北大学在学一年目のこれら八点の書簡は、在松本時及び荷物の手配等の謝辞、仙台の印象や暮らしぶり、信州への郷愁や懐古、豊への友情・気遣い等が主な内容である。特に仙台への引越しの前後には頻繁な遣り取りがあった。

「北茂吉—IV—2」は昭和二十三年四月二十九日に仙台へ引越す直前頃の茂吉書簡の寄書である。杜夫は大学合格後直ちに仙台行はせず、まずは松本行を実行する。松本の荷物整理は勿論のこと、受験での上京以来、久しぶりとなる信州への傾慕、愛着によるところが大きかったと言える。茂吉の丁寧な謝辞の一方、杜夫は松本から帰り「無事歸京致しました。あの日、幸ひ澄みきった大気の涯に、残雪楚々たる穂高をむさぼるやうに見送ることができ、今うすぎたない都の街に、信濃の自然をかみしめてゐます」と松本行を振り返り、信州の自然への係恋の情を記している。

「北—I—5」は「北茂吉—IV—2」から四日後、文面の「明後二十九日に立つ豫定です」と消印から四月二十七日、仙台行の二日前の執筆と判断できる。松本から一旦東京に送った荷物を仙台に送ってきたこと、謝辞に添えて「豊君にも連絡してあります」と記されている。学部は異っても初めての上高地行以来、下宿等において世話になった與曾井湧司の子豊が同じ大学に進学したことを心強く思っていたであろうと察せられる。また、四月の授業が始まり医学部の友人からは「みんな心配してるだの、講義が朝8時から夕5時まででノートのブランクが大変だの」と言われても「モサ／＼してゐます」「ノンキなものです」と杜夫はマイペースであった。合格してもなかなか仙台には意識が向かず躊躇とさえ読み取れ、信州に意識が向いていたことを指摘しておく（詳細は「杜夫日記」）。

「北—I—6」は、四月二十九日に仙台に着き間もない「五月二日」（杜夫自筆）、仙台の第一印象「きたない街」が素直に記され、下宿を移った豊と寮で会ったとある。また「僕も今のところがよくないので又探さねばなりません。医学部はをかく／＼シボります。つまらなくてかなひません」と慣れない様子が率直に記されている。そうした中、杜夫をとらえ癒してくれるかのように「山吹き」「ボケ」「うぐひす」等自然の姿が記されている。

「北—I—7」は、「北—I—6」のわずか四日後の「五月六日」（杜夫自筆）執筆である。松本からの荷物の到着と謝辞を伝えている。「机も前より丈夫になってつきました」とあり、修繕済みの机が送られた事実には杜夫の嬉しさが現れている。本書簡にも信州へ寄せる懐古の思いは「松本——三城辺の緑はさぞ美しくなったことだろうと想像されます」と記されるが、現実の講義は「つまらなくチンブンカンブンで閉口です」と対照的である。

「北—I—8」は、三度目の松本行の卓球部合宿、東京のインターハイ観戦、夏休みの童馬山房（箱根）での茂吉との生活も終え一旦帰京し、仙台へ戻る直前、九月十日（推定）の執筆である。五月以降四か月の無沙汰を詫び、夏休み明けの豊の仙台行を推し量りつつ自らの仙台行の準備を進めている近況を伝えている。その後、松本での卓球部合宿の様子やストーム、インターハイ観戦の結果が書かれているが紙面の都合か、一か月近くの茂吉との箱根生活には触れず、家族のことは茂一の発熱のみに留めている。

「北—I—9」は、周囲に気づかれないよう内緒で松高記念祭に参加し、一旦帰京。辻邦生と会い、その後仙台に戻って一週間経つての執筆である。記念祭の折に泊めてもらった謝辞、仙台で豊と再会したときの様子等について詳しく伝える内容である。それまでの

抑えられない松本への郷愁がこの三度目の松本行となったと考えられる。文中、「ホ、カムリしてごまかしてしまひました故何とぞそのお積りでゐてください」にほのかなユーモアと深刻さが滲みでている。内緒にせざるを得ない杜夫の事情があつたと行間から読み取れる。

「北―I―10」は、本論第二章第二節において昭和二十四年一月十日より前の正月頃と推定した。冒頭に発熱のため師走二十八日夜帰京したこと、一月「十五・六日」から始まる医学部に合せて仙台に戻るなどが記されている。更に「―――今日も、寮時代の下級生が来て色々松本の話をして、さすがに懐かしくてたまりませんでした」(傍点引用者)とあり、松本への郷愁が記されている。七日夜には辻邦生とも新宿で会つており、後輩の訪問はその翌日辺りとも考えられる。このように仮定すると本書簡の執筆は一月八日、九日頃と推定できる。如何あれ昭和二十四年新年、仙台に戻る直前、杜夫の心中に松本への強い郷愁が在ったことは事実である。

北―II―1は、與曾井湧司宛書簡中、唯一ワラ半紙の手紙である。本書簡が書かれた大筋は以下のように考えられる。昭和二十四年一月七日から九日頃、東京で辻邦生や寮の後輩と会い松本への強い郷愁に駆られた杜夫は、茂吉日記「一月十日」に「○宗吉朝、仙臺に¹²出立」(本論第二章第二節参照)とあるように、一旦は仙台に向けて出発した。しかし、「杜夫日記」によると、十三日から十七日には松本行(二度目の密行)を実行している。本書簡はそれを裏付ける貴重な資料と言える。書簡の左肩に「二十四年一月十九日受領」(與曾井湧司の筆跡と考えられる)とあることから、本書簡は郵送されたものではなく、立ち寄り先の友人がブルネンのところ¹³でワラ半紙を貰い、急ぎ書き止め、誰かに手渡しを依頼し、與曾井湧司の手

元に届いた書簡と考える。内容は「今度は、色々、或る教授及び友人と相談することがあり、再び密行しました」(傍点引用者)に始まり、内緒の松本行と判断できる。その際、松本で茂吉との縁故で世話になった與曾井、松崎の両宅を訪ねる予定であつたが、友人が来たり飲みすぎたりの理由で訪問できず、心苦しく仙台に戻るこゝがやや過剰な弁解的筆致で書かれている。更には今回の松本密行は「公認」でない故、「秘密にしておいて下さい」と記し、今後は「とにかく医学を勉強する決意を固めましたから御安心ください」と結んでいる。東北大学の受験勉強の時以来、茂吉からの依頼¹⁴により、杜夫の勉学への声かけに関わつてきた與曾井湧司に向けて勉学の決意を伝える内容となつている。

(3) 與曾井湧司宛書簡の解釈

これまで杜夫の松本時代に関連する與曾井湧司宛書簡について、松本高校一年時から東北大学一年時までの十六点(杜夫葉書十点、茂吉葉書三点、茂吉葉書に杜夫の寄書二点、ワラ半紙の手紙一点)について個々の書簡の解釈を進めてきた。本節ではそれらを概観、総括し、十六点の與曾井湧司宛書簡の解釈をまとめていく。

書簡十六点を時系列で概観すると、松本高校在学時書簡群と東北大学一年時書簡群の間に対照的な傾向が見出せる。松本高校在学時の書簡群においては杜夫が茂吉の近況を伝えたり、茂吉が與曾井湧司に謝辞を伝えたりするような茂吉に関連する内容が顕著である。これは松本高校の入学、東北大学の受験から合格、そして引越し等の際、茂吉の過保護、過干渉とも言えるほどの寵愛が元になっていたと考えられる。しかし一方で、茂吉の山形県大石田での疎開時の茂吉の病に関連する杜夫の記述もあり、茂吉の縁故関係や終戦前後という時代背景も茂吉関連の内容が多いことの要因の一つであつた

と考える。

ところが東北大学一年時の書簡群を見ると、茂吉に関連する記述は「北茂吉―Ⅳ―2」の茂吉の謝辞のみであり、他は見られない。一方こうした傾向とは対照的に、医学部の講義に関心が向かず、松本への郷愁と懐古、係恋の情は益々顕著になっている。更には、大学一年時四回の松本行（密行を含む）へとつながっていく。

こうした松本高校在学時に顕著な茂吉に関する記述と、東北大学一年時に顕著な松本への郷愁や係恋の記述との対照性は、杜夫のどのような内面的状況から生じてきているのであろうか。その要因の一つとして杜夫の茂吉認識の変化を指摘しておく。

拙稿「其の一」「其の二」においても論考したように、松本時代の杜夫にとって茂吉は、以前は煙ったい雷親父であったが、その短歌を通して文学に覚醒し尊崇する対象となっていた。そして、精神的な思春期を迎えた杜夫は、目の前の以前と変わりない煙ったい茂吉像と短歌の中の尊崇する茂吉像といった二面性をもつ茂吉に対し、理解し難い存在へとその認識を変化させていった。

茂吉の厳命によって動物学を諦め表面的には医学を志した杜夫であった。しかし、昭和二十三年松本高校卒業から東北大学入学一年目の時期、杜夫は医学に関心が持てず、懐かしい松本や信州の自然への回帰を抑えられない状況になっていたと考えられる。

一方、医学の道を志し勉学に専念せよと下宿の手配をする茂吉に対しては、表面的には憤怒や激怒を起こさせないように振る舞わねばならなかったと推察する。杜夫が「北―Ⅱ―1」のワラ半紙に綴った「松崎さんにも若しお会ひの節はその様にお話下すって秘密にしておいて下さい」にその辺りの事情が現れており、「秘密にしておいて下さい」の「誰に」に当たる対象の中心には茂吉の存在が在った

と考えられる。松本への密行が茂吉に縁故ある人々の人脈網から茂吉に伝わっていくことを当時の杜夫は怖れていたと推察する。

このように考えてくると、與曾井湧司は、対峙しきれない茂吉という存在を内面に抱えていた当時の杜夫が、心を許し本音を表現できる数少ない人物の一人であったと考えられる。更には、その子豊に対しても初めての上高地案内から東北大学の学生生活の始まりまで、親密な関係を持ち、心の支えとなっていた人物であったと指摘しておきたい。

與曾井湧司宛未公開書簡はこうした杜夫の内面が克明に綴られた貴重な書簡群であると考ええる。

2 書簡の文学的価値

與曾井湧司宛書簡の文学的価値については、書簡の解釈的側面と文体的側面の二つの側面から考察していくとする。

(1) 書簡の解釈的側面

書簡の解釈では、特に東北大学一年時の内容は郷愁に駆られた杜夫が四回の松本行を実行した際の茂吉認識の変化を指摘し、徐々に茂吉に気づかれぬように松本行を実行していった点を明らかにした。以下に四回の松本行の期間を列挙し確認する。

- 一回目 昭和二十三年四月四日～十八日 茂吉公認
- 二回目 昭和二十三年七月十二日～十八日 茂吉公認
- 三回目 昭和二十三年十月十二日～十七日 密行
- 四回目 昭和二十四年一月十三日～十七日 密行

これら四回の松本行は単に郷愁に駆られるままに繰り返されたも

のではなく、杜夫が抱いていた幾つかの動機が重層的、発展的に織り合わされ、杜夫の心の奥底に重要な意味をもたらし、文学作品へと表現されていたと考える。この時期の書簡の内容に沿って『どくとのマンボウ青春記』（以下「青春記」と略記、頁数は参考文献3による）並びに「杜夫日記」（頁数は注1による）に目を通すと、杜夫に松本行を駆り立てた主な動機として以下の四点を挙げることができる。

- 信州松本の自然（美ヶ原方面、上高地方面等）への郷愁
- 松本高校の伝統的行事や卓球部の応援
- トーマス・マン、リルケ（望月市恵）への関心
- 辻邦生等との文学的友情

こうした動機が、四回の松本行の過程でどのように織り合わされ、初期詩篇等の作品が紡がれていったか、その概要を以下に見ていくとする。

一回目の松本行は、與曾井家に置いてあった仙台に送る荷物の整理をするという茂吉公認の明確な目的があった。信州の自然への郷愁にかられ久しぶりに訪ねる松本に胸をはずませて向かったと推察する。しかし、この一回目の松本行は杜夫の心の奥底に喪失と追憶をもたらし、孤独感を実の場で体験する結果となっていた。「四月十一日」（「杜夫日記」(P.15)）、杜夫は「旧制高校最後の新入生」（「青春記」(P.171)）入寮の日に寮の新入生歓迎コンパに出席した。「青春記」にはその時の印象を「騒々しさはもう、僕の若さをよみがえらせてくれない（中略）僕は教授の席に坐らされて大恥をかいだ」（「杜夫日記」(P.18)）と冷静であった自分を追憶し描いている。

また「途方もない孤独と人は言うが、やっぱりのかなもの同士のつながりを、そこはかかない因果を、僕は信じないわけにいかない」（「杜夫日記」(P.16)）とし、作品創作の状況を残している。

伴はつまらないものまでノートに貼って整理していた。一、警備基底に関する件、総務部なんてのがあった。僕の書いた文字に昔のなきがらを見つけ出したみたいだ。過ぎ去ったものよ。忘却を、僕も信じよう。文字文字の影もうすれ、記憶もかすんでしまい、そんな時にふいと君や君のおもかげの浮ぶ時、僕は一篇の詩が作れるだろう。（「杜夫日記」(pp.16-17)）

更に「四月十二日」（「杜夫日記」(P.18)）には「千鳥足で歩いた縄手が妙にノスタルジアを誘った」とし、「四月十三日」（「杜夫日記」(P.19)）には以下のような心の叫びを記している。

稚さと若さの住んだ町の手もつけられぬつかしさ、うれしさ、ほのかさ。そうして見なれた、歩きなれた道ととききっている学校と、心に残り、また残したであろうそんな人々。そう、そうだ。僕は、僕はほんとうに、もう帰りたくない。

そして松本を去る「四月十八日」（「杜夫日記」(P.22)）には「なつかしかった信州よ、俺の若さのすてどころよ、しばし、さようなら。感情は理性を麻痺させる」と、別離の万感の情を綴っている。

その後、上京し代田にもどった杜夫は、仙台行の準備をし、その前日「四月二十八日」（「杜夫日記」(P.24)）に、松本での「四月十二日」の千鳥足で縄手通りを歩いた夜の思い出を「かの夜を思ひ

起して歌へる 酒乱の歌(註。「どく」とるマンボウ青春記」に出した詩の原型)」と題して作品を執筆している。

また、一回目の松本行時の日記には「リルケの言葉をかみしめていた」(「杜夫日記」(P.12))等リルケに関する記述が多く、拙稿「其の二」第二章第四節第三項に考察したように、当時の杜夫は「物の実相」を茂吉の芸術観に類似するリルケの芸術観にも目を向けながら把握しようとしていたと考えられる。「四月十三日」(「杜夫日記」(P.20))の辻邦生訪問宿泊、「四月十六日」(「杜夫日記」(P.21))の望月市恵訪問宿泊の目的の一つにリルケに対する関心を指摘することができる。

二回目の松本行は、杜夫は先輩として卓球部の合宿に参加し、その後は先輩と一緒に上京しインターハイを応援するという、やはり茂吉公認の目的があった。その前の四月、五月の書簡には医学部の勉強に意識が向かず、消極的のためらいがちな状況が記される一方で、仙台で耳にする「うぐむす」の声に信州を思い出し、五月の陽光にも松本の三城牧場辺りの新緑を連想するなど、郷愁を記している。

また、一回目の松本行で体験した喪失感、追憶と孤独感はその後も消えることなく、むしろ募っていったであろうと推察する。四月二十九日に仙台に戻った杜夫は「仙台に今日きた。相変らずきたない街だ」(「杜夫日記」(P.26))と記し、「五月二日」には辻邦生に手紙を書いた時の状況を次のように記している。

とある丘の松林の蔭の木株に腰かけて辻に手紙を——センチメンタルと言ってよいほどの——書いた。日輪はくもり空の中で自分のまわりを明るくしている。リングはくさりかけていて

まずかった。何から何まで腹立たしく、信州が恋しく、うぐいすの声などをわずかなぐさめとして僕は同じ道をもどり始めた。(傍点引用者)(「杜夫日記」(Pp.28:29))

こうした状況の中でなかなか思うように詩が書けず、五月の日記では断章を連ね、「五月二十四日」(「杜夫日記」(P.68))、「五月二十五日」(「杜夫日記」(P.71))の日記には「ユーウツ」の語を頻繁に記すようになる。

詩が書けぬ。まったく書けぬ。どうしたらいいんだ。現象は心をつきぬける。「美」はいたずらに逃げまわる。ユーウツなる、あまりにユーウツなる。(中略)ユーウツなる、あまりにユーウツなる。いつもの道を僕は帰る。(「杜夫日記」(P.71))傍点引用者)

「杜夫日記」によるとこの翌日「五月二十六日」(P.75)夜、「狂詩」を書き始めている。その後日記にはトーマス・マン、リルケに関わる記述が顕著となっていく。

○「マンの「トリスタン」を読み、まどろみの中に堪えがたい苦痛を味わった」(「五月二十八日」,「杜夫日記」(P.76))

○「マンの「道化者」を読み終る」(「五月二十八日」,「杜夫日記」(P.78))

○「マン。「魔の山」を読みたい」(「五月二十九日」,「杜夫日記」(P.80))

○「露店にたかる人、人。鼓動しているみにくい街。電車を待

ちながら、リルケの「ロダン」を取り出して読んだ」(六月一日、「杜夫日記」(P.102))

○「男は愛し、女は愛される(中略)してみると、リルケの言う偉大なる女なぞちよつとこの世にはいそうもないようだ」(六月二十二日、「杜夫日記」(P.150))

二回目の松本行までのこうした杜夫の内面を見てくると、一回目の松本行を終え、以前にも増して感傷性が募り、信州に恋い焦がれ、憂鬱な日々を過ごす中、トーマス・マンやリルケを読みながら自己を回復させていったと考えられる。初期作品「狂詩」はこうした情況で執筆されていた。

その後、トーマス・マン、リルケへの関心が益々高まった杜夫は「七月十七日」二回目松本行最終日前日、望月市恵を訪ね、マンの「人生略図」の借用へと意識がつながっていったと考える。

三回目の松本行は、茂吉に内緒の密行となった。杜夫はお忍びで十月の松高記念祭に顔を出し、書簡の中では「ホ、カムリしてごまかしてしまいました」と記し、茂吉に気づかれぬよう細心の注意を払った文面となっている。杜夫が三回目以降茂吉に気づかれぬよう内緒の松本行をしていくこととなった最大の理由は、夏休みの茂吉との箱根滞在中(七月二十六日～八月三十日)の次の出来事であったと考える。

トーマス・マンやリルケの文学に惹かれていった杜夫は、箱根でもマンの短編や「トニオ・クレーゲル」を紐解き、「人生略図」を読み、マンの芸術観に思いをめぐらしていた。そのような中、杜夫は茂吉との離れ屋の生活の中では「マンの本もこそそ隠れて読まねばならなかった」(「青春記」(P.228))。そして茂吉に対して「私の文

学志望は絶対に秘しておかねばならなかった」(「青春記」(P.228))と悟っていく。その理由となる出来事は、「青春記」に描かれた以下の茂吉との遣り取りであった(「其の二」第二章第四節第一項参照)。

ある日、だしぬけに父が唐紙をあけ、先に述べた自伝の載っている雑誌を読んでいた私は、現場を見つけられてしまった。しかし、それがドイツ語で息子が勉強していると思ったのか、父は怒りもせず、しかしまずいことに雑誌を手にとって読みはじめた。ずいぶん長いこと、およそ二時間も無言で坐ったまま読んでいて、とうとう終りまで読みきってしまった。

はらはらしながらそれを見守っていた私は(中略)トーマス・マンという名を辛うじて知っているらしい父に、その神聖な午前の時間のことをこちらから話してやった。父は珍しくおとなしく聞いていて、やがてぼつりと言った。

「毛唐の中には、なかなか偉い奴がいる」

それで私は調子づき、今度はリルケの話をはじめた。(中略)私は望月先生からの耳学問を図に乗って述べ立てた。

「リルケは、どんな主観でも、それを表わす客体が必ずこの世界の中にあるといっています」

すると父は、

「おまえは大したことを知っているな」

と、いったん感服した模様だったが、

「おまえは一体どこからそんなことを覚えてきた?」

と、たちまち険悪な気配を漂わした。(「青春記」(PP.228-229))

このような理由による三回目の松本行密行では「記念祭、何も言いたくない。これだけ分裂した気持ちを生理的に感じただけでも行った価値がある」（「杜夫日記」(P.223)）とアイロニカルに表現し、記念祭そのものを懐かしむ松本行ではなかったことを示している。むしろ「戸惑いと郷愁」「失われたものへの愛着」「不当な歓迎」「孤独」等を抱かせる密行であった。とすると三回目の最大の目的は、トーマス・マンやリルケの文学について教えを乞いたいという思いからの望月市恵訪問であつたろうと考えられる。「杜夫日記」(P.223)には「與曾井さんで泊る」の後に、「翌日、望月さんのところに堤と一泊。いい先生だ、とにもかくにも」とのみその時の情況が記されている。杜夫、堤らと望月市恵の談話内容は不明であるが、三回目の松本行は茂吉に内緒故、益々高まつていったであろうトーマス・マン、リルケへの関心が中心であつたと考える。

この松本行の前後で杜夫は松本時代の追憶を題材に昭和二十三年初期の四篇「穂高を見る」(七月)、「うすあをい岩かげ」(九月)、「あの頃の歌」(九月)、「成長」(十一月)の各詩篇を創作している。

四回目の松本行も三回目と同様、茂吉に内緒であつた。本論第六章第一節第二項に考察したように、「杜夫日記」と「茂吉日記」の整合性を検証すると、内緒というよりも寧ろ茂吉を欺いているニュアンスさえ読み取れる。昭和二十四年一月十日、一旦は仙台に出發すると家を出、茂吉にもそう理解させておいて、「杜夫日記」(PP.242-243)によれば、十三日から十七日は松本在が明らかである。その後は上京、辻邦生の家に寄り東北線の夜行で仙台に戻るというルートであつた。

四回目の松本行直前の書簡(北—I—10)年賀状では「今日も、

寮時代の下級生が来て色々松本の話をして、さすがに懐かしくてたまりませんでした」とあり、下級生の代田訪問が四回目の密行の動機の一つになっていた可能性がある。また、この文面から、松本への懐古や郷愁は、訪ねた際の現実の情況に「喪失」「追憶」「孤独」と心境の変化はあつたとしても、常に杜夫の心の底流に流れていたと判ずることができる。

四回目の松本行密行の直後の書簡(北—II—1)には、「今度は、色々、或る教授及び友人と相談することがあり、再び密行しました」とあることから、三回目の密行同様に望月市恵、辻邦生らとの再会と文学談義が主な目的であつたと考えられる。この間のことは「杜夫日記」(PP.242-243)に端的に記され、詳しい情況は不明である。

一月十三日

松本の空気は生理的なノスタルジアを感じさせる。新雪に飾られた山影は、あまりにも美しく淨らかで、ただ呆然とするばかり。苦しんでちよつとノートをとつたが、とてもかなわない。

(中略)

蹴球を二時間やり、午後、望月先生と太平堂で三時まで話し、赤羽さん宅でメシを食い、夜、浅間で辻、堤、大貫と飲む。

日記の文面から、四回目の松本行は望月市恵、辻邦生等との松本での再会の約束、事前打ち合わせや計画があつたと推察する。

以上、書簡の解釈的な側面から四回の松本行に関わつて杜夫の主な四つの動機「信州の自然への郷愁」「松本高校伝統行事」「トーマス・マン、リルケ(望月市恵)への関心」「辻邦生らとの文学的友情」がどのように織り重なり、どう杜夫の意識が変化發展していっ

たかを考察してきた。以下にまとめを箇条書きにして列挙する。

○ これまで「杜夫日記」「青春記」等では十分捉えきれなかった昭和二十年から昭和二十四年、特に昭和二十三年から昭和二十四年の松本行前後の詳細な足取りを明らかにし、杜夫の意識の変化、初期詩篇等創作の動機を明らかにしていく上で、貴重な資料である。

○ 四回の松本行において、当時の杜夫の心の奥底にあったと考えられる意識は、当初の信州の自然や松本高校の生活への「郷愁」「懐古」に加え、徐々に「医学選択への懐疑」「喪失感」「孤独」等、憂鬱な「苦悩」や「葛藤」へと精神的な変化が生じていった。更に、茂吉への背離的意識、トーマス・マン、リルケへの傾倒、敬慕へと変化し、信州や松本への郷愁や回帰がより強くなっていく中で、初期詩篇や「狂詩」等作品創作へとつながっていった可能性を明らかにしていく上で、貴重な資料である。

○ 四回の松本行の中、一・二回目は茂吉公認であったが、三回目以降の密行は、茂吉に文学志望を知られなくなかった、という理由に拠るところが大きいことを明確にしていく上で貴重な資料である。

○ 四回の松本行の過程で杜夫のトーマス・マン、リルケへの関心が徐々に高まっていき、望月市恵に学び辻邦生等と交流していく中で、初期詩篇や「狂詩」執筆につながっていったことを明確にする上で貴重な資料である。

(2) 書簡の文体的側面

原子朗は「北杜夫における文体の特質——その序論的考察」¹⁵⁾にお

いて、『少年』の冒頭を引用し、杜夫の文体の特質となる原形が宿されていると指摘した。そこには杜夫の童児性¹⁶⁾があり、「北杜夫の文学の本質が童話性にある」と述べている。更に、この冒頭のように「北杜夫は常に時間と空間を無限定の流れとひろがりにおいてとらえる」と指摘し、限定としての自己主体の卑小さが意識される中から「死の意識を究極とする抒情が発生」し「そのあわいや亀裂をうずめ、調和させるのがユーモア」となると述べている。そして「北杜夫における抒情とユーモアは同根」であると論じている。與曾井湧司と書簡が交わされた先の四回の松本行の頃、杜夫の内面は原の論考のように、孤独感が更に内向していき自己の卑小性が増大することにより抒情性は一層高まっていった可能性もあると考えられる。

本論考では、まず原の考察をふまえ、書簡群を検証していくことにする。本論第六章冒頭に示したように、杜夫の松本時代に関連し執筆された與曾井湧司宛書簡は全十三点である。ここまでの書簡の解釈、考察を生かしながら、文体的特徴を修辞学的観点から「あや」について分類しているピエール・ギローの『文体論——ことばのスタイル』を参考に、書簡の具体的な表現内容を以下に考察していく。十三点の書簡に共通する印象的な特徴は、與曾井湧司並びに豊への優しい気遣いと、ユーモアの感じられる表現である。以下にその特徴的な表現について具体的に考察を進める。

「北——」では、「美ヶ原」と表現するところを「美」一字で表し、続けて不在であったことを詫び、豊への気遣いや写真の手配等、細やかで人情味のある杜夫の一面が表現されている。杜夫が日頃から「美ヶ原」を「美」と言っていたかは不明であるが、そこには與曾井湧司であれば分かるという前提があったようにも読み取れる。この省略的で象徴的な「美」の表現には一面、ウィットやユー

モアも感じられる。「構成のあや―省略法」

「北―I―5」では、四月後半になっても仙台に心が向かず、東京に居る状況を「東京でモサ／＼してゐます」と比喩的な擬態語で表し、松本からの荷物が届いたことへの謝辞や豊への連絡の心遣いも忘れずに付け加えている。「モサ／＼」の意味は、『広辞苑第七版』によると「①多くの毛・草などが生え乱れているさま。②動作の緩慢なさま。③口の中でうまくみくだせないさま」とある。杜夫はあえて片仮名の疊語として反復記号を使って表している。実際、仙台の医学部に意識が向かなかった情況があったとしても、数日前の松本行で與曾井の世話になった荷物の整理も影響している背景にあったとすれば、この杜夫の自嘲的なユーモアのある表現には與曾井への心遣いも感じられてくる。「語のあや（転義法〔比喩〕―隠喩）」

「北―I―9」では、三回目の松本行を秘密裡にと進めた自分の情況を「信州行きはどうやらホゝカムリしてごまかしてしまひました」と曖昧さを加えながら、「ホゝカムリ」と比喩的に表現し、そのイメージにユーモアを漂わせている。またその上で、「豊君に一度会ひ、昨夜は寮に遊びに行つて（後略）」と豊の情報についての気配りも添え伝え、全体に杜夫の優しさが漂っている。「ホゝカムリ」は「頬被り」で「ホオカムリ」に同じ。『広辞苑第七版』によると「頬被り」の意は、「①頭から頬へかけて衣服や手拭などをかぶること。②その事を知つていながら、知らないふりをする。こと。ほかふり」とある。本書簡の「ホゝカムリ」には単に「知らないふりをする」の意味だけでなく、杜夫の密行それ自体の行為を後ろめたいもの、こそそとしたものとして自らを客観的に認識し、思考やイメージそれ自体を誇張した表現となっているようにも感じられる。「語のあや（転義法〔比喩〕―隠喩）、「思考のあや（誇張法）」

「北―II―1」は、四回目の松本行が「密行」であり、色々な事情で訪ねられなくなったことを詫びる内容である。本書簡では、この間の事情を次々と重ねていき、最後に詫びに至るといふ、一面言い訳がましくも滑稽ともとれる表現である。

再び密行しました。で、始めは與曾井さん、松崎さんなどのお宅に全く寄らない積りでしたのですが、バれましたので、辨解に参上する積りでしたが、豫定の時に不意に友人が來たり、最右の夜は行くべきときに■少しの酔にのびてしまひ、本日十時の汽車で歸仙しますが、とう／＼お訪ねできず、まことに心苦しいのですが、悪しからず御■諒承下さい。（後略、網掛けは杜夫の塗潰し、筆者記）

更に、「松崎さんにも若しお会ひの節はその様にお話し下すつて秘密にしておいて下さい」と重ねて茂吉に漏れないように配慮している。また、文末には「今度はとにかく医学を勉強する決意を固めましたから御安心ください」と與曾井への気配りも添えられ、杜夫のユーモアと細やかな優しさが融合した表現となっていると考える。「構成のあや―統辞」

以上、抒情性とユーモアが感じられる特徴的な表現について、ピエール・ギローの分類を添えながら文体的な特徴（省略法・転義法〔比喩〕―隠喩・誇張法・統辞等）を見てきた。ここに指摘した四つの書簡は、いずれもユーモアが感じられるとともに、杜夫の細やかな気遣いや優しい人柄が融合した文体として読み取れ、書簡でありながら豊かな抒情性が醸し出されていると考える。先の原の「北杜夫における抒情とユーモアは同根」の考察は、本書簡の中にも見出す

ことができ、本書簡群は杜夫特有の文体の源泉であると指摘することができる。

さて、本書簡群は青年期の杜夫が本音を率直、自由奔放に、與曾井湧司に語りかけるように書かれたものが多い。仮名遣いはほぼ旧仮名遣いで統一されているが、細かな文字表記や文法的な正確性の部分までは拘泥されておらず、荒削りの原木のような文章とも受け止められる。そこで文体に関連する考察として、文字表記、文法上の特徴に関連して片仮名の用法と修飾語の用法の二点を挙げておきたい。

一点目は、片仮名の混用的用法である。一般的に片仮名は外来語・動植物全般・擬声語・擬態語・感動詞等に用いられるところであるが、杜夫の本書簡群の場合（特にⅠ・Ⅱ群）は、それに加えて普通は漢字か平仮名で表記するところを、あえて片仮名で表記し、そこに独特なニュアンスやユーモア、強調的意味等を付け加えようとする傾向がある。その結果、片仮名を多用している印象を受ける文面もある。用例を以下に列挙する。（括弧は一般的な表記、傍点引用者）

- 「大アワテ」（大慌て）……「北Ⅰ—2」
- 「フンキ」（暢気・呑気）……「北Ⅰ—5」
- 「チラ、かした」（散らかした）……「北Ⅰ—6」
- 「シボります」（絞ります）……「北Ⅰ—6」
- 「フトン」（布団・蒲団）……「北Ⅰ—7」
- 「チンブンカンブン」（ちんぷんかんぷん）「北Ⅰ—7」
- 「出陣ダアッ」（出陣だあつ）……「北Ⅰ—8」
- 「タイコ」（太鼓）……「北Ⅰ—8」

- 「ホ、カムリ」（頼破り）……「北Ⅰ—9」
- 「ゴチソウ」（御馳走）……「北Ⅰ—9」
- 「バれました」（ばれました）……「北Ⅱ—1」

こうした片仮名の用法は、その後のマンボウ・シリーズ（エッセー）、ユーモア小説、児童向け小説等、様々なジャンルにも望みされる表記であり、杜夫独特の文体を形成していると考ええる。

二点目は、先の文体的側面の「構成のあや—統辞」に関連する修飾語の構成である。文法論における構文論的観点からみると、言語（言葉）の構成段階におけるリズム感を指摘することができる。「北Ⅱ—1」のユーモラスにも言い訳がましくも感じられる修飾語（修飾部）が幾重にも重なり述語（述部）に係っていく表現スタイルは、杜夫が昭和二十一年十二月の学期末試験物理の答案に書いた「僕の物理学」（「其の二」第二章第一項参照）を想起させる。そこにはユーモアの発生と共に或る種のリズムが生じてくる。文章におけるリズム感覚については、杜夫は茂吉短歌の韻律に深く感動し、学んだところが多かった（「其の一」第三章参照）。ここでは、杜夫が当時深く共感し読み親しみ、敬愛していたトーマス・マン、更には後年杜夫が『青年茂吉』に明かしたディケンズからの影響、茂吉、トーマス・マン、ディケンズ等に共通と考えられるフモールについて考察する。昭和四十五年七月（杜夫四十三歳）杜夫は辻邦生との対談でトーマス・マンの翻訳の文体について触れ、以下のように述べている。

「ぼくが『トニオ・クレゲル』で思い出すのは実吉さんの訳で、これは、たとえば「鴉が鳴いている——噎れて、佗しく、

頼りなく……」と、副詞が三つぐらい並ぶ。日本語だと、前に副詞がならぶのだけだね。ところがあの人は「鴉が鳴いている」と書いて、そのあとに、原文にはないダッシュをつけ、副詞を並べて……。 (中略) もうひとつ、古い訳で『トニオ・クレール』では竹山道雄先生の忘れたい名訳がある。たとえば、トニオがリュウベックを再訪して、つぎにコペンハーゲンのいたる所で、家の名前に周知の名前を見る。あの目を、あの髪を、あのブロードを、そしてあの顔を……、と言うところ、素晴らしいリズム感のある日本語だ。(P.66) (傍点引用者)

彼の文章というのは、——ぼくはドイツ語はわからんけど、音楽性が大事なんだ。これは、マン自身が日本の新聞に寄稿して、私の翻訳者は音楽性を大事にしろ、と言っている。むだな形容詞や、似たような副詞がずらりと並べてある、あれはただの細密描写ではなく、リズムをとっているんだよ。(中略) もう一つある。マンの粘液質、——医学用語で言うところの「癲癇氣質」と言うんだ。これは、泡を吹いてぶっ倒れるわけじゃない。非常に几帳面だとか、丹念だとか、とことんまでやり抜かないと気がすまないというのが癲癇氣質で、これがマンのいろんな氣質のなかでいちばん重要なことで、ある対象を射当てるのに、マンは、四方八方から形容詞を重ねないと気がすまない。これと、音楽性と、二つだ。(P.91-92) (傍点引用者)

與曾井湧司宛書簡十三点 (I群十点、II群一点、IV群二点) が書かれた松本高校一年から東北大学一年当時、杜夫のトーマス・マン文学の享受は翻訳を通してであった。先の対談では、杜夫は大学時

代にマンの『衣裳戸棚』の翻訳を試みたことがあったが「エヴェレストと愛宕山くらいの差異があったので」(P.67) 途中で諦めたと言っている。その翻訳の中で、杜夫がマンから受けた影響は、「音楽性」(リズム感)とマンの粘液質から生じる「とことんまでやり抜かないと気がすまない」という副詞や形容詞等、修飾語(修飾部)を積み重ねた表現であった。

対談の「フモールとイロニー」では更に辻が「君自身、フモールの作家だと言われるが」(P.97)と杜夫に尋ねると、杜夫は「ぼくは、自分の言葉で解説したくないね、もっと齢とるまで。へユーモアについては、辻あたりがくどくど述べるがいいよ」(P.97)と語るに留め、立ち入った話を避けていた。

ところが、後年昭和六十三年一月(杜夫六十一歳)から平成三年一月(杜夫六十四歳)にかけて、岩波書店の雑誌「図書」に「茂吉あれこれ」と題して「赤光」「あらたま」時代の茂吉伝(『青年茂吉——「赤光」「あらたま」時代』)を執筆していく中で、杜夫は自身のフモール観について語った。そこではまず茂吉特有のフモールについて触れ、続いて自身のフモール(ユーモア)についても語っている。

まず、「I「赤光」時代」では茂吉独自の体臭から始まり、「茂吉が特有なフモール(ラテン語でユーモアの意だが、原義はギリシャ語の体液)をおのずから秘めた人間」(第十一節、(P.84))であったと回想する。続いて第十六節では、茂吉の氣質については、杜夫の兄茂太の『茂吉の体臭』を受け、「もっとも強かった氣質は癲癇氣質(粘液質)であり、次に神経質であった」(P.121-122)と述べている。更に、その氣質は茂吉の父「熊次郎から受け継がれている」(第十七節、(P.127))と述べ、「癲癇氣質には、徹底癖、執拗性などと

共に、どうしても癩癩持ちの性格も伴う」(P.128)と、「熊次郎が六歳くらいの茂吉を背負って早坂新道を越えて上山に向かったとき」(P.128-129)の癩癩のエピソードを紹介している。

次に杜夫自身については「Ⅱ「あらたま」時代」に、岩波雑誌「世界」に茂吉の死を綴った短編「死」の合評に対して立腹したエピソードを紹介した後、以下のように記している。

私のユーモアは、トーマス・マンから学んだと自分では思っていたが、いちばん似ているのはディケンズである。しかし、私が最大の傑作「デビッド・カッパーフィールド」を読んだのはずっと後のことで、これは私のフモール(ギリシャ語で元の意は体液)がおのずからそうだったのであろう。「楡家」に対するアメリカの書評の一つの題は「日本のディケンズ」であった。(P.182)

杜夫の文体的な特徴を考察する際は、その根底に茂吉、トーマス・マン、ディケンズ、そして晩年自らを吐露するように語っている杜夫自身の四者に共通するフモールの観点からの詳細な検証が今後の課題であると指摘しておきたい。

おわりに

本論考で考察・検証を進めてきたように、北杜夫が與曾井湧司氏に宛てたこれらの書簡群は、北杜夫文学の基礎的研究資料として、非常に価値が高いと思われる。その文学的な価値を考えると、今後 は然るべき文学館等で保存されていく方向が期待される。

筆者は、幸運にも平成二十七年八月五日、八月八日の両日にわたり、與曾井豊氏と面識の機会を得、当時の杜夫との具体的な様子についてインタビュー取材をさせていただいた。そして、本研究の趣旨をご理解いただき、寄贈本や貴重な書簡資料の閲覧・撮影、豊氏のお写真の撮影、拙稿掲載等をお認めいただいた。豊氏に深謝の意を表し、心よりご冥福をお祈りする。

本論考に関連する資料の著作権については、本年八月七日、杜夫の長女齋藤由香氏よりご連絡があり、齋藤家の許諾をいただいた。更に、国立国会図書館所蔵の杜夫資料に関しては、喜美子夫人の許諾書を添えて申請し、拙稿掲載許可をいただいた。喜美子夫人、由香氏に深謝の意を表する。

また、齋藤茂吉記念館の後藤明日香氏より貴重なご助言をいただいた。重ねて感謝の意を表する。

注

- (1) 北杜夫『或る青春の日記』(中央公論社、平成4・11・25)
- (2) 北杜夫『母の影』(新潮社、平成9・5・1)
- (3) 「二、杜夫と茂吉の年代記」「二、松本高校入学の経緯」等(其の一)、「二、初期詩篇等の諸相 5 夢の断念(一) 茂吉の書簡」(其の二)等に記述す。
- (4) 與曾井豊は平成二十九年五月二十八日逝去(昭和三年一月生、八十九歳)。
- (5) 信州大学工学部同窓会に問い合わせたところ、卒業生台帳の昭和二十三年三月の卒業生名簿に「與曾井豊」の名前を確認した。
- (6) 「書簡四」の「昭和二十三年、六八五七」(『齋藤茂吉全集第三十六巻』(P.87))には「十月二日 仙臺市支倉通り一 伊達宗雄兄」に「宗吉についていつも御懇情たまはり感謝いたします。お隣りで食事付きにして下さっ

た」とあり、本書簡は同一住所であることから「仙台市支倉通一山本和様方」は茂吉と親密な関係のあった伊達宗雄宅の隣宅と考える。

- (7) 「北——10」の執筆日推定の根拠は「茂吉日記」であるが、「杜夫日記」によると一月十三日に松本行と考えられる記述があり、一月十七日に東京経由でその後仙台へ向かったと推測できる内容が見られる。詳細は注12参照。

- (8) 「美」は「美ヶ原」の省略と考えられる。「美ヶ原方面の採集記録」（松本まるごと博物館連携企画展「北杜夫と松本」展示解説図録）（松本市立博物館、昭和25・7・13、P.55）によると、昭和二十年の採集記録に「二回目、昭和20年1945 IX 26・30三城」とある。筆者が同年九月のカレンダーを調べると九月三十日は日曜日であり、本書簡の通り杜夫が美ヶ原に行っていたことを確認できた。

- (9) 第二次世界大戦までの日本の士官学校において、最上位の者を最右に配置し、成績順に右から左に列べた事に由来する言い回し。「最右翼」には、「最も優れた」、「最左翼」には「最も劣った」という意味がある。「優勝候補の最右翼」とは、最も優勝しそうな人の意味である。

- (10) 北杜夫（当時のペンネーム北宗夫）「穂高を見る」「うすあをい岩かげ」（「文学集団」五月号（昭和24・4）入選）。写真資料は国立国会図書館所蔵のコピーを筆者撮影、トリミング。国立国会図書館の拙稿掲載手続を経て許可を得た。

- (11) 北杜夫（当時のペンネーム北宗夫）「成長」（「文学集団」四月号（昭和24・3）入選）。写真資料は国立国会図書館所蔵のコピーを筆者撮影、トリミング。末尾の一行「さわやかにうつくしい少年よ」は次頁。国立国会図書館の拙稿掲載手続を経て許可を得た。

- (12) 『或る青春の日記』の以下の内容より一月十三日から十七日にかけて四回目の松本行が秘密裏に決行され、その後東京経由で仙台に向かったと判断できると。——「一月九日」に茂吉からリュックサックを「借りることになる」（P.242）と書かれ、日付が飛び「一月十三日」に「松本の空気は生理的なノスタルジアを感じさせる」（P.242）とある。「茂吉日記」「十日」の「宗吉

朝、仙臺に立立」の後十三日までの足取りは不明であるが、「杜夫日記」では次に「一月十五日」の「ドンド焼き」、日付が飛び「一月十七日」に電車のデッキから松本の風景を見つめる際は「涙ぐんでいた」（P.243）と書かれる。続いて「昨夜」（P.243）十六日の食事や「ブルンネン」のところへ行つた時の記憶等が書かれるが、「註。このあと九行塗りつぶし。今後は一々断わらない。」（P.243）と記され、その後、東京で辻邦生の家に寄り、東北線の夜行、暁方の車窓風景、詩「初冬」と描かれている。日記の日付は次に「一月二十日」となり「仙台は予想外に寒い」（P.245）と仙台在の状況が読み取れる。十八日から十九日の足取りは不明。

- (13) 杜夫の日記等に使われる「ブルンネン」は松本高校三年の三学期に友人と遊び心から結成した太陽党（少年への愛）で、気に入ったデル・リーベ（男性の恋人）につけた「泉」（ブルンネン）からきている。（拙稿「其の一」第一章第四節及び『どくとるマンボウ青春記』（P.111-112）参照）

- (14) 「書簡四、書簡補遺、昭和二十三年」（『齋藤茂吉全集第三十六巻』）によると、茂吉が與曾井湧司に杜夫の下宿の世話や受験勉強の監督、声かけを頼んでいたと分る内容が書かれている。（本論第六章茂吉書簡参照、九〇八六（P.87）、九〇九一（P.839））

- (15) 『國文學 解釈と鑑賞——特集北杜夫の文学世界』（至文堂、昭和49・10）

- (16) 原は杜夫の童児性について「作者の童児性——あらゆる芸術の母体ともいえる——は、作者に感覚的遊行を自然にさせ、稚純な書法をとらせている。そしてその稚純さが〈回想〉をこえて、そのまま文体となつてゐる」（P.75）（傍点原）と論考している。

- (17) ディッケンズ（Charles Dickens）「1812～1870」「英国の小説家。ユーモアとペーソスのある文体で下層市民の哀歓を描き、ビクトリア朝時代を代表する作家として名声を得た。作「オリバー・ツイスト」「クリスマス・キャロル」「二都物語」など」（『大辞泉』）

- (18) 北杜夫・辻邦生『北杜夫・辻邦夫対談——若き日と文学と』（中央公論社、昭和45・7・10）

参考文献

- 1 『北杜夫全集』全十五卷（新潮社、昭和51・9・25～昭和52・11・25）
- 2 『齋藤茂吉全集』全三十六卷（岩波書店、昭和48・1・13～昭和51・4・30）
- 3 北杜夫『どくとるマンボウ青春記』（中央公論社、昭和48・6・10）
- 4 北杜夫『歌集 寂光―北杜夫若年歌集』（中央公論社、昭和56・4・20）
- 5 北杜夫『青春詩集 うすあをい岩かげ』（中央公論社、平成5・10・25）
- 6 北杜夫『少年』（中央公論社、昭和45・11・5）
- 7 北杜夫『青年茂吉』（岩波書店、平成3・6・27）
- 8 北杜夫『壮年茂吉』（岩波書店、平成5・7・29）
- 9 北杜夫『茂吉彷徨』（岩波書店、平成8・3・8）
- 10 北杜夫『茂吉晩年』（岩波書店、平成10・3・16）
- 11 『文学集団』（一卷一号（昭和23・5））～三卷三号（昭和25・3）草原書房）国立国会図書館蔵（平成29・9・2閲覧）
- 12 『詩学』（第五卷、第三号（昭和25・4・30）、六号（昭和25・6・30）、七号（昭和25・7・30）、九号（昭和25・10・30）、十号（昭和25・11・30）岩波書店）国立国会図書館蔵（平成29・9・2閲覧）
- 13 斎藤茂太『茂吉の体臭』（岩波書店、昭和39・4・27）
- 14 ピエール・ギロー、佐藤信夫訳『文体論―ことばのスタイル』（白水社、昭和34・2・5）